

# 西南戦争

報道と、その広がり 久留米大学御井図書館 貴重資料企画展

西南戦争—報道と、その広がり



## 西南戦争

久留米大学文学部

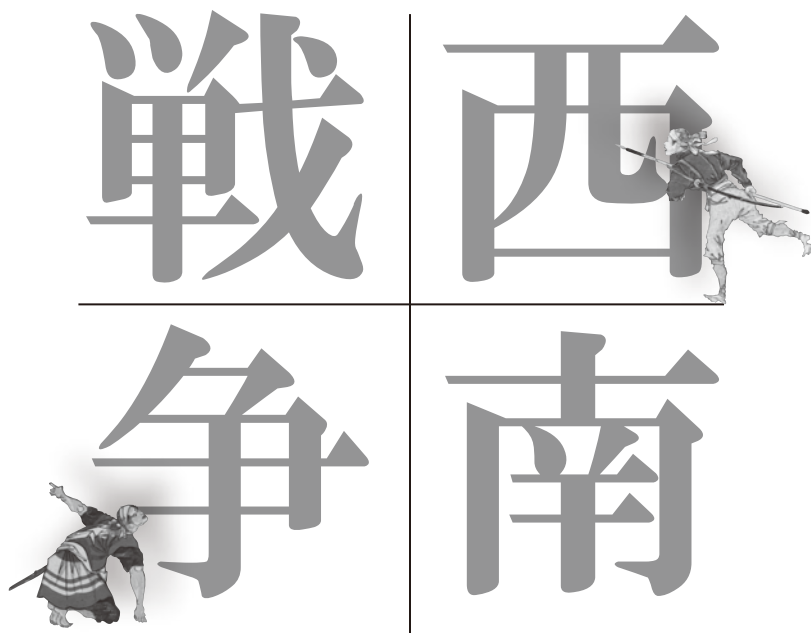
2014



久留米大学御井図書館

貴重資料企画展

# 西南戦争



報道と、その広がり



平成二十六年（二〇一四）四月十五日（火）～八月十五日（金）

第Ⅰ期

「戦争の始まり・混乱過熱する報道・大阪における報道」

四月十五日（火）～六月十三日（金）

第Ⅱ期

「さまざまな報道・戦争の終結・暮らしへの浸透」

六月十六日（月）～八月十五日（金）

会場

久留米大学御井図書館エントランス

企画・準備

久留米大学文学部国際文化学科

大庭卓也研究室

宇野圭太郎（大庭ゼミ四年生）

岩本 涼（ ）

齋藤 佑太（ ）

八郷 将徳（ ）

東 史佳（ ）

平田美瑠希（ ）

三好 皓也（ ）

## 「あこがれ」

久留米大学文学部は、学部開設以来、地域社会に貢献できる人材の育成を基本理念とした教育に邁進するとともに、平成十六年には、本学御井図書館に「筑後文化資料室」を設置し、筑後地域の文化や歴史資料の収集にも努めてまいりました。

平成二十三年の開設二十周年の折には、記念事業の一環として、「筑後文化資料室」の収集資料のうちから、本学医学部の前身である九州医学専門学校のご出身で、日本現代詩の代表的詩人であった丸山豊先生の旧蔵書に焦点をあてた「丸山豊展」を御井図書館で催し、先生の作品の豊饒な世界を紹介いたしました。また、平成二十四年には、江戸時代を代表する福岡の学者貝原益軒の業績をたどる「貝原益軒の学問と著作」展を開催し、そして今回は「西南戦争―報道と、その広がり」展を催すこととなりました。

明治十年に起った西南戦争は、熊本、宮崎、鹿児島など九州各地を舞台とした、わが国最後の内戦であり、今回の企画展ではこの戦況がいかに報道され、当時の文化にどのような影響をおよぼしたのかを考えております。

御井図書館の限られたスペースでのささやかな企画展ではありますが、地域社会への貢献を目指した久留米大学文学部の教育と研究活動の一つとしてご理解いただければ幸いです。

平成二十六年三月

久留米大学文学部長 木藤 恒夫



# 目次

1	——  ごあいさつ	久留米大学文学部長 木藤恒夫
5	——  本企画展のねらい	大庭卓也
7	——  西南戦争の報道と出版界	生住昌大

## 図版

19	——  戦争の始まり
20	——  混乱過熱する報道
24	——  大阪における報道
28	——  ささまざまな報道
31	——  戦争の終結
33	——  暮らしへの浸透
38	——  参考図版

## 参考資料

60	——  作品解説
74	——  西南戦争関連年表
76	——  参考文献
77	——  作品目録

## 凡例

1. 本書は、平成二十六年四月十五日（火）から八月十五日（金）を会期として、久留米大学御井図書館で開催する企画展「西南戦争―報道と、その広がり」に際して作成した図録である。
2. 展示は、スペースの関係から、本書でカラー図版に掲載するものを順次入れ替えながら行う（ただし、諸般の事情により展示しないものもありうる）。したがって本図録の番号は、展示番号と対応するものではない。
3. 本展示で取りあげるテーマを充分に理解できるよう、関連作品を単色の参考図版として掲載した。
4. 図版キャプションは、作品名、作者名、員数、届出・版行年代の順に記した。作品名の角書きは【 】で示した。作品名が記されていないものは、編者が与えた仮題を「」内に記した。制作年を推定した場合は（ ）内に記した。
5. 作品解説は、カラー図版はすべてに、参考図版はセレクトして行い、巻末の参考資料に収めた。
6. 各作品の詳細なデータは、巻末の作品目録に記した。
7. 本図録の編集と執筆は、大庭卓也（本学文学部准教授）と生住昌大（佐世保工業高等学校講師）が分担して行った。

# 本企画展のねらい

大庭 卓也

九州の人間にとって、明治十年の西南の役は、いたって身近な歴史上の事件である。私のようなまだ若輩に属する世代でも、小さい頃から折にふれて、田原坂の戦いで命を落とした美少年の悲話などを、家庭や学校で聞いて育ったという人は少なくないであろう。また、歴史を教わるようになってからは、教科書やその他色々な本で、官軍と薩摩軍の交戦を描いた錦絵も目にするようになり、当時こうした戦争絵が、新聞の代用であったことを次第に理解したことがある。

江戸文学を研究していると、自然、明治の書物を手にする機会も多いが、そんな時、書名に「西南」とか、「鹿児島」とか、「西郷」とか、そういう文字を冠した実録風の読物や草双紙に出くわすことがしばしばある。いずれも明治十年、おそくても二十年を過ぎない頃の刊行で、皆一様に西南の役に材をとっている。これらが、歴史の教科書で見覚えしてきた錦絵や、明治に普及した新聞報道と干渉をもつものであることは、畑違いの研究をする私などにもぼんやり推察できて、まだ江戸の余風たゞよう当時の文壇が、この戦いをめぐって大いにもり上がり、西南戦争物とでも呼ぶべき一箇のジャンルを、文学史上に形成していることが思われてくる。

しかし明治十年頃といえば、かつては文学の暗黒時代などと評された時期である。西欧の文学理念を視野に入れながら新たな小説のあり方を模索して、わが国近代文学論の起点となった坪内逍遙の『小説神髓』の刊行は、さらに降って明治十八年まで待たねばならない。近時、篠田仙果の『鹿児島戦争記』に注釈が加えられるなど（『新



『日本古典文学大系明治編13』平成十九年、岩波書店）、研究に新たな動向が見られるものの、西南戦争物の作品群は依然として、近代文学の研究では冷遇視されている感は否めない。また、他の領域でこれらの作品群が研究の対象とされる場合にも、おおむね、西南戦争を視覚的に理解する補助資料、あるいは明治期の浮世絵やジャーナリズムの一面を考えるための材料ほどにしか扱われず、おびただしい数の錦絵や実録草双紙の全容を把握したうえで、それら相互の影響関係や内容推移の検討が、これまで充分に行われてきたとは思われない。

本企画展は、近代文学の研究の立場から、西南戦争物に取り組んでいる生住昌大氏に協力してもらい、以上のような問題意識のもと、西南戦争の報道がもつ文化的な波紋を改めて考え、江戸から明治にかけての文学史のひとコマを明らかにしようと試みるものである。なお、展示の準備には私のゼミ生諸君に当たってもらった。古い文物をじかに手にすることが、わが国の歴史や文化への理解を深めるきっかけになると考えたからである。

（久留米大学文学部准教授）

# 西南戦争の報道と出版界

生住昌大

はじめに

明治一〇（一八七七）年二月、西郷隆盛を盟主とする鹿児島県士族がおこした反政府暴動、いわゆる西南戦争は、熊本から宮崎、鹿児島へと舞台をうつして、同年九月二四日、西郷の自決をもって収束した。

新聞各社はこぞって暴動の詳細を報道しつづけたが、写真技術が普及していない当時、より鮮明に人々に実況を知らせたのは、江戸時代以来、庶民が親しんできた錦絵（木版多色刷りの廉価な絵画。浮世絵とも）であった。浮世絵師が新聞の記事をたよりとして、時には虚構をまじえながら描いたシーンに、ごく簡潔な説明を添えるという、いわゆる西南戦争物の錦絵は、東京や大阪で盛んに売り出され、その数は六〇〇種にのぼるともいわれる。

こうした錦絵の虚構性は、人々の想像力をさらにかきたて、西南戦争は事態が収束した後も、歌舞伎や小説、さらには双六といった玩具にまで取り込まれてゆき、暮らしのすみずみに浸透していった。

以下、「西南戦争錦絵」の刊行の実際とその広がりを見てゆこう。

## 「西南戦争錦絵」刊行の始まり

明治六年に征韓論に敗れ、鹿児島に下野した西郷隆盛は、鹿児島城内に陸軍士官養成学校（通称、私学校）を設立したが、その勢いは県内各地に一三〇もの分校を持つほどとなり、政府にとっては脅威の一つとなっていた。そこで政府は、明治一〇年一月下旬、鹿児島県下にあった陸軍省砲兵属廠の武器・弾薬を大阪へ移すため、秘密裏に赤龍丸を鹿児島へ派遣し、搬出を行った（赤龍丸事件）。これに憤慨した私学校の者たちが、西郷隆盛ら幹部には無断で各地の弾薬庫を襲撃し（弾薬掠奪事件）、また二月三日に、政府の探偵を捕縛すると、西郷隆盛暗殺説が浮上し、政府と私学校との対立は決定的となった。こうした流れの中で、二月一五日、西郷隆盛を擁したおよそ二千人の鹿児島県士族が挙兵し、ここに西南戦争が幕を開ける。そして、開戦後まもなく、赤龍丸事件および弾薬掠奪事件は、小林清親【新聞】「鹿児島事情」（東京、武川清吉版、19頁掲載、図版1）として、大判三枚続の錦絵に仕立てられている。本図には「二月十九日御届」とあり（出版には事前の届け出が必要であった）、この時期から「西南戦争錦絵」の刊行は始まるのである。

挿図1

明治一〇年二月七日「東京日日新聞」に見える弾薬略奪事件の報（毎日新聞東京本社制作、マイクログ資料「東京日日新聞」による）

○昨六日の朝より市中にて又例の如くチラリネラリと面白からぬ風聞を成し鹿児島士族が去月卅一日小暴徒を成し櫻島の向ふなる弾薬製錬所を襲り取たりと申す悉報が届きたりとの噂を傳ふるものあり或は一昨五日は熊本よりの電報にて来りたる報なりとも云ひ甚しき密かに其筋へ御内殿ありしとも云ひ取よの評判にて虚實の程は更にお取ならず去れども石の睡り早くも米商會所より知れたるか昨日の午後二時ごろより米の景氣は俄かみ立直り夕方方へも十三錢だかみ相成りたる由なり又鹿児島縣にては今度の御改正お付去月二十七日を以て参事以下の役とを盡くし参事のそれより辭して再び出仕せずと云ふ噂あり猶くいしき事ハ篤と探訪を盡して書き漏すべけれバウカと世上の風説を信ずるとなれ

○正五位土方元君の昨日大番頭官を兼任されて調査局長と成られたる由

挿図2  
錦絵版「東京日々新聞」五二一号（国立国会図書館蔵。同館デジタルコレクションより転載）



挿図3  
錦絵版「東京日々新聞」「思案橋の暴徒事件」（個人蔵）



西南戦争を錦絵に仕立てようというその着想は、おそらくは「錦絵新聞」（「新聞錦絵」とも）から得ている。当時の大半の新聞は、写真はもちろん挿絵さえ備えてはいなかったが、その決定的に欠けていた視覚情報を補うことを目的として、明治七年に錦絵版『東京日々新聞』（二蕙齋芳幾画、〈東京〉具足屋版）が、翌八年には錦絵版『郵便報知新聞』（月岡芳年画、〈東京〉錦昇堂版）が続けて創刊されたのであった。これらは、大判（約三九cm×二六cm）一枚に大きく挿絵を描き、新聞記事に基づいた詞書（説明文）を併記して、種々の事件を視覚化した。この内、『東京日々新聞』が、明治九年一〇月末に九州・山口地方や東京で相次いでおこったいわゆる「士族反乱」に際しては特別に、大判三枚続の錦絵に仕立てており、西南戦争勃発の数か月前に描かれたこれらの様式を摸して、「西南戦争錦絵」は刊行されたものと考えられる。

後述するように、実に多種多様な「西南戦争錦絵」が刷られたのだが、もともと一般的なものは、大判三枚続である。画題および新聞記事によった詞書を画面上方に配し、大判三枚続の大画面に戦地の様子が描き出される。価格は六銭。現在のの一五〇〇円程度の値段に相当する。東京で大判一枚あたり一銭六厘、二銭、三枚続で六銭が相場であった。

新聞に欠けていた視覚情報を補った「西南戦争錦絵」は、およそ一年間の内に六〇〇種を越える数が刷られた。これは、一日に一枚以上の新作錦絵が刷られた計算となるが、しかし意外にも、ある時期まではほとんど売れなかつたらしい。明治一〇年四月一七日付『朝野新聞』には、以下のような記事が見える。

○西国征伐の錦画ハ追々二三十通りも出したれど、見物ばかりで一向売れないとの噂なりしに、何故か此月に入つて夥しく売れ出し、追摺の手が廻らぬ程だといふ。

すなわち、四月までは「見物ばかりで一向に売れない」状態が続いていたのであった。

### 「西南戦争錦絵」の盛り上がり

では、「西南戦争錦絵」が、四月に入ってから「夥しく売れ出し」たその要因は、何であつたらうか。戦争の激化でより多くの庶民の関心をひき、そのことが「西南戦争錦絵」の流行を促したのだと考えるよりは、新聞メディアの質的向上が人々の関心をより高め、その結果として視覚情報を補う錦絵にもより一層の需要が生じたと考える方が、実情に即しているように思われる。

挿図4  
【鹿児島紀聞之内】副将村田討死之図（鹿児島県立図書館蔵）



明治一〇年二月に、九州で西南戦争が勃発すると、東京の新聞各社はこぞって取材記者を派遣したのだが、特派員の多くは、征討大本営が置かれた京都で戦報を待つのみであった。政府から提供される情報は限られ、記者は巷に流れてくる噂話までも拾って記事にしたが、その結果として紙面には、誤報も多く飛び交うこととなった。

例えば、三月五日付『東京日日新聞』は、「三日午前十一時廿分発にて、福岡出張の警視官より、電信に官軍大勝利にて、賊巨魁村田新八ハ戦死せりとの報あり」と、薩摩軍二番大隊長村田新八の死を報じた。しかし実際は、西郷隆盛の自刃を見届けてからの進撃、そして戦死であり、村田新八は西南戦争終結の九月二四日まで戦い続けたのであった。すなわち、新聞は誤報記事を掲載したわけであるが、それを知らずに錦絵に仕立てたのが、三月一四日御届の楊州周延「鹿児島暴徒追討記」（〈東京〉加藤定次郎版）である。本図は、「村田新八なる者が討死したるハ、明治十年二月下旬の事なりけり」と詞書に記して、村田新八の死を報じた。そして、三月二〇日御届の月岡芳年「鹿児島紀聞之内」副将村田討死之図」（〈東京〉小林鉄次郎版）もまた、「……激戦に、此手の賊将（村田）木の葉（地名）に討れ其外死傷多かりける」（括弧内、原文のまま）と記して、村田新八の戦死を描いている。風聞をも取り込み、混乱を来した報道からは、誤報を視覚化した錦絵が刷られもしたのである。

そうした中で、いち早く戦地に身を投じて取材を行い、現地取材が可能にした速報性と正確性を兼ね備えた記事を書いたのは、『東京日日新聞』の福地源一郎や『郵便報知新聞』の犬養毅であった。彼らの記事は、両紙にそれぞれ掲載されるや否や、読者に好評をもって迎えられた。三月二四日に『東京日日新聞』で福地の「戦報採録」の連載が始まり、同月二七日には『郵便報知新聞』で犬養による「戦地直報」の連載がスタートする。「西南戦争錦絵」がようやく売れ出した明治一〇年四月という時期は、これらの現地速報により、庶民の西南戦争に対する関心がさらなる高まりを見せた時期とちょうど重なり合う。「戦報採録」や「戦地直報」が人々のより一層の関心をひき、その結果、戦場の迫力や臨場感を視覚に訴える「西南戦争錦絵」の需要が高まり、人々は西南戦争に釘付けになってゆくのであった。

ちなみに、「西南戦争錦絵」は新聞記事を視覚化する、補完的な役割を果たしたメディアであったから、当然のことながら速報性も求められた。例えば、四月一八日付『東京日日新聞』記事に基づいて描かれた、山崎年信「鹿児島紀聞」川尻本営図」（〈東京〉福田熊次郎版）には、「明治十年四月十九日」の届出日が記されている。つまり、記事の翌日には錦絵出版の手続きを済ませるといふ、力の入れようなのである。こうして版元は読者の求めに可能なかぎり応じたのであった。



### 絵師たちの想像力の源泉

「追摺の手が廻らぬ程」に人氣に火がついた四月、「西南戦争錦絵」の代表的な題材の一つとして繰り返し描かれた、女隊図が版行されている。目に入ったもののうち、もっとも早く女隊を描いたのは、四月一四日御届の歌川房種「鹿兒嶋紀聞」（〈東京〉辻岡文助版）である。画面左に薙刀に鉢巻姿の、四人の女武者が描かれ、詞書には「西郷の手に女兵隊在といふ」とある。これに、四月一六日御届の楊洲周延「鹿兒島征討記」肥後国二重嶺戦争之図」（〈東京〉山本平吉版）、四月一二日御届の楊洲周延「鹿兒嶋女隊力戦ノ図」（〈東京〉松下平兵衛版、20頁掲載、図版3）、四月二七日御届の月岡芳年「鹿兒島戦争図」（〈東京〉福田熊次郎版）が続き、終戦となるまで女隊は描かれ続けた。女隊図は、美人画を得意とした楊洲周延の作を始めとして、非常に多くのものが確認できる。

しかしながら、女隊の存在を今に伝える歴史的記述あるいは記録は見当たらない。すなわち、いわゆる「史実」とは認められていない出来事が、「西南戦争錦絵」には積極的に描かれていたのである。女性を描く美人画は、錦絵の好題材であったゆえ、売らんがための販売戦略として事実報道を度外視した女隊図を描いたのだと、従来はそのように考えられがちであった。殺伐とした戦争絵の中で、色とりどりの着物を身にまとい、紅の襷たすきに白の鉢巻姿で薙刀なみだたを振るって躍動する女隊図は、文字通り異彩を放っており、見る者の目を喜ばせたであろうことは、想像に難くない。

だが、錦絵の画工である浮世絵師たちが、根も葉もない荒唐無稽な絵を描いたわけではなかったことに、注意を払わねばならない。確かに絵師たちは、戦地から遠く離れた東京・大阪で、想像をめぐらして作画を行っていたのだが、彼らはまったく根拠のない想像力を働かせたわけではなかった。絵師たちの想像力の源泉というべきものが、確かにあった。それは、新聞記事である。以下のように、薩摩軍の中に女隊が存在することを記事は報じている。

#### 三月二九日付『郵便報知新聞』

○我兵卒の話に、賊軍の鯨声を発する時、往々女の声を聞く。又、望遠鏡にて望み見るに、婦女子の薙刀を携へ駈馳奔走するを見ると。甚だ信じ難き風説なり。

#### 四月三日付『郵便報知新聞』号外

○薩兵の内に女軍千人計り一隊をなしたり。皆垂髪にて帯剣せりとも云い、又此中の大将分ハ西郷の妻にて、小荷駄奉行ハ西郷の嬢だとも申升が、甚だ受取れません。



左もありなん歟。

楊洲周延「鹿児島征討記聞」(〈東京〉木曾直次郎版、明治一〇年九月一八日届)

……其婦妻ども憤然として隊を組み、夫の敵と官軍の陣所を目がけて、抜刀にて急流の難所もいとハズ、必死をきハめて抗戦なせば、女隊なれど侮りがたく、勇戦数刻に及ぶと也。

小林永濯「鹿児島軍記」八代口激戦之図(〈東京〉船津忠次郎版)

……此手の暴徒に女隊ありて、薙刀ふり働くさまハ、最勇々敷ぞ見えたりとぞ。

いずれの詞書にも、伝聞体が用いられている。このことは、風説に基づいて作画されたことを裏付ける証左となる。その風説の飛び交う場所とはすなわち、新聞紙面である。

しかし、新聞紙上に流れた風説記事が、錦絵の詞書に仕立て直されるとき、新聞記事に記された疑義の言葉(「甚だ信じ難き風説なり」「甚だ受取れません」「どうも本当とハ思われぬが」「全く跡形もなき妄説にて」等)が削除されている点に注意されたい。戦場に立つ女子隊の存在を否定する言葉を一切排した詞書が、自動的に女子隊の実在性を補強することとなっているのである。

このようにして、浮世絵師は新聞記事に基づきながら版下を作画し、市井の人々は「西南戦争錦絵」を通して視覚的に西南戦争を体験したのである。疑いの目が向けられていたものの、薩摩女隊の存在は新聞紙面上で確かに報じられており、その意味においては、決して荒唐無稽な存在ではなかった。そして、新聞記事の書き換えが行われ、疑義の言葉を排した詞書とともに女隊が実際に画中に描かれることによって、女隊は「事実」への接近を果たし、その女隊図を人々は享受したのであった。

この他にも、人気の図案として、力士を描いたもの(山崎年信「鹿児島記聞内」賊兵激戦之図、〈東京〉辻岡文助版、41頁掲載、参考図版6)や一騎打ち(梅堂国政「鹿児島新聞之内」田原坂進撃之図、〈東京〉沢久次郎版、22頁掲載、図版5)を取り上げたものがある。これらも女隊図と同様、四月前後から描かれ始めて、幾種類も刷られた。また、後述する西南戦争関連の読み物の中でも、これら人気の図案は繰り返し描かれた(大西庄之助編「鹿児島軍記」、42頁掲載、参考図版8)。いずれもいわゆる「史実」とは言い難い、荒唐無稽なものだが、やはり風聞として世間を賑わわせた新聞記事を種として、絵師たちは想像を膨らませ、積極的に描いたのであった。

## 終わらない西南戦争

時に、女隊図や一騎打ちなどの人気の図案が出たが、そもそもは刻々と移り変わる各地の戦闘の様子を描き伝えるのが、「西南戦争錦絵」の主眼であり、新聞記事を基にして西郷の自刃まで途切れることなく報じられた。西郷隆盛の死は、一〇月六日御届の細木年一としかず「西郷隆盛戦死ノ図」(〈東京〉黒瀬幸太郎版、52頁掲載、参考図版16)などで描かれ、さらには一〇月二六日御届の一英齋歌川芳艶「西南鎮定賞賜図」(〈東京〉木村定五郎版、54頁掲載、参考図版17)などで西南戦争終結の祝宴の様子が報じられた。これにて、新聞紙上における西南戦争報道はほぼ幕引きとなるが、錦絵の方はそうとはならなかった。

枚挙に暇はないが、西郷隆盛の死後まもない一〇月五日には、大判二枚続の「西郷涅槃像」(〈東京〉熊谷庄七版)の出版届が提出されている。本図は、横臥する西郷隆盛を「土族」「坊主」「へび」「うし」などが取り囲み、嘆き悲しむ様子を描いた死絵しにえ(著名人の死亡時に刊行された追善絵)の一種である。また、東京の版元児玉弥七が、絵師進齋年光に依頼し、これまでに版行されたであろう大判三枚続の「西南戦争錦絵」八図を再度簡略化して描かせ、それらを大判三枚続にまとめ直した、いわばダイジェスト版錦絵「鹿児島戦争記」(33頁掲載、図版17)を版行している。届け日は一二月二三日で、西南戦争終結から二か月後のことである。さらに、同じ月には、月岡芳年の手になる二枚の絵双六、「鹿児島平定寿語録」(〈東京〉津田源七版、一二月七日届、34頁掲載、図版19)と「鹿児島凱陣双六」(〈東京〉大倉孫兵衛版、一二月一七日届、34頁掲載、図版18)が版行されている。明治一一年二月には、西南戦争に取材した歌舞伎「西南雲晴朝東風」おきげのくもはつゆあけが上演され、九代目市川團十郎が西條高盛(西郷隆盛)を、初代市川左團次が岸野利秋(桐野利秋)を、五代目尾上菊五郎が篠原国元(篠原国幹)を演じたと伝わる。それに伴い、役者絵を得意とした豊原国周や楊洲周延らの役者絵(36頁掲載、図版22・23)が多く刷られて、これもまた人気を博した。そして、おそらくはこの時期に、「西南勇士集」(画者・版元未詳、35頁掲載、図版20)と「熊本近傍戦争之図」(画者未詳、〈京都〉山口市太郎版、35頁掲載、図版21)と題された、銅版刷りの扇の地紙絵が売りに出されている。西南戦争の余波は、庶民の生活のこのようなところまで及んでいたのかと、実に興味深い。

## その後の出版界

これまでに西南戦争関連の錦絵について触れてきたが、西南戦争関連の書物も、開戦直後からすぐに刊行されて、一年ほどの間に一〇〇種ほど刊行されて賑わった。事件当初は、西野古海編『鹿児島追討記』(〈東京〉木村文三郎版、明治一〇年二月刊、38頁掲載、参考図版1)や樋口徳造編『鹿児島戦争記』(〈東京〉又新舎版、明治一〇年三



挿図8  
「西郷涅槃像」(個人蔵)



挿図9  
『明治英名百首』(半紙本一冊、個人蔵)



挿図10  
『近世』英名百首伝(小本一冊、個人蔵)



月刊、39頁掲載、参考図版2)など、半紙本(約二七cm×一八cm) 仮綴じ(本文の料紙だけを重ねて綴じたもの)の、粗雑な読み物が出まわった。それが次第に、挿絵を備えるようになり、話の筋も物語化していき、本の装丁自体も、江戸の読本(数丁置きに挿絵を備える)や草双紙(毎丁に挿絵を備え、その余白に本文を置く)の様式を踏まえるようになってくる。西南戦争終結後は、草双紙体裁の読み物、早川徳之助編・松月保誠画『絵本』西郷一代記(東京)小森宗次郎版、明治一〇年一〇月刊、56・57頁掲載、参考図版19)が一四冊揃いの大部で刊行されており、いち早く西郷隆盛の生涯を描いて商品化しようとした版元の動きも見える。

西南戦争は、新聞業界にとっては近代ジャーナリズムの要件が、速報性と正確性にあることを知らしめる契機となり、出版界においては、江戸時代以来の錦絵文化が再び注目を集めるきっかけを促した。さらに、明治一〇年代には、西南戦争に関わり錦絵に描かれた官軍・賊軍の個々人に脚光を当てた人物伝出版が盛り上がりを見せ、篠田仙果編・生田芳春画『明治英名百詠撰』(東京)村上真助版、明治一二年、58頁掲載、参考図版21)を皮切りに、略伝・肖像・詠草を載せた異種百人一首本の流行へと繋がる。その盛り上がりは、以下の如くである。

〈明治一二年刊〉

篠田仙果編・生田芳春画『明治英名百詠撰』(文泉堂版)

〈明治一三年刊〉

沼尻桂一郎編・鮮斎永濯画『現今』英名百首(宝文閣版)

〈明治一四年刊〉

沼尻桂一郎編・鮮斎永濯画『現今』英名百首(文光堂本)

沼尻桂一郎編・鮮斎永濯画『現今』英名百首(講古堂本)

沼尻桂一郎編・鮮斎永濯画『現今』英名百首(同盟閣本)

安井乙熊編・松斎吟光画『明治英名百人首』(錦松堂版)

谷壮太郎編・歌川豊宣画『近世文武』名誉百首(松林堂版)

〈明治一五年刊〉

成瀬礼三郎編・画工不明『近世』英名百首伝(文真閣版)

篠田久次郎編・画工不明『明治』英名百首(榊原友吉版)

〈明治一六年刊〉

木村文造編・画工不明『明治』英名百首（木村文三郎版）

福城駒太郎編・長谷川竹葉画『明治』英名百首（文盛堂版）

沼尻絰一郎編・鮮齋永濯画『現今』英名百首（豊住伊兵衛本）

隅田古雄編・一立齋国峯画『今人名誉百首』（金松堂版）

〈明治一七年刊〉

木村文造編・画工不明『明治英名文武鑑』（木村文三郎版）

〈明治一八年刊〉

沼尻絰一郎編・鮮齋永濯画『現今』英名百首（敬文閣本）

谷俊三編・鮮齋永濯画『現今』英名百首（魁盛堂版）

谷俊三編・鮮齋永濯画『現今』英名百首（椿香堂高崎本）

梅亭金香編・画工不明『明治』英名百首（鶴声社版）

右に確認できる篠田仙果は、柳々子仙果としても「西南戦争錦絵」の詞書を多くものし、『鹿児島戦記』（東京）青盛堂版、明治一〇年二月二六日届、40頁掲載、参考図版5）などの実録（事実の記録を売りとした読み物）もまた多く記した。沼尻絰一郎は『鹿児島紀聞』（東京）若栄堂版、明治一〇年三月一五日届）や『西南鎮静記』（東京）万笈閣版、明治一〇年八月三一日届、九月二〇日出版）という実録作者であったし、鮮齋永濯は『鹿児島新報』田原坂激戦之図』（東京）植木林之助版、明治一〇年三月届）などの錦絵を描き、安達吟光も明治一〇年当時は真匠銀光の号で『鹿児島新聞』熊本城戦争図』（東京）福田熊次郎版、明治一〇年三月届、20頁掲載、図版2）などの作品を残している。明治一〇年代に、異種百人一首で出版界を盛り上げた者の中には、西南戦争に報道と出版という側面から関わった者たちが多くいた。従来、「文学の暗黒時代」と言われてきた明治一〇年代の出版界であるが、以上のように彼らの活動を子細に見るならば、我々の想像よりもはるかに活況を呈していたと見るべきではあるまいか。

（佐世保工業高等専門学校講師）



# 図版

戦争の始まり

混乱過熱する報道

大阪における報道

戦争の終結

暮らしへの浸透

参考図版

各カテゴリーにおけるカラー図版と参考図版の対応

- \* 戦争のはじまり 図 1-2 / 参考図 1-3
- \* 混乱過熱する報道 図 3-6 / 参考図 4-8
- \* 大阪における報道 図 7-8 / 参考図 9-13
- \* さまざまな報道 図 9-12 / 参考図 14-15
- \* 戦争の終結 図 13-15 / 参考図 16-17
- \* 暮らしへの浸透 図 16-25 / 参考図 18-22

## ■戦争のはじまり

明治に入って普及した「新聞」。文章のみで報道するものに加え、新聞記事のひとつを大判一枚に絵を主体として報じる、大衆向けの錦絵新聞も生まれた。明治十年二月十五日に幕を開けた西南戦争は、錦絵新聞の特大号のかたちを踏襲して、大判三枚続の大画面で報じられた。価格は六銭（今日の一五〇〇円ほど）。この版型と価格は、以後の西南戦争錦絵のオーソドックスなスタイルとなる。一方、新聞各紙が日々報じる記事の要点をまとめた、報道読み物も数多く刊行され、遠い九州の地で展開する戦況が各地に伝えられてゆくことになる。



1—【新聞】鹿兒島事情  
小林清親画 大判錦絵三枚続  
明治10年2月19日届



2



3

## ■ 混乱過熱する報道

新聞記者たちは、政府から提供される情報とは別に、巷にながれてくる噂話をも積極的に拾いあげて記事を書き続けた。誤報も多く含む記事は、人々の想像の源泉となり、それがまことしやかに錦絵や草双紙に描かれてゆく。一騎打ち、女隊の奮闘、力士の参戦——。こうした虚像と、三月末頃から刻々と伝えられるようになった現地取材による実像とが入り交じりながら、報道は一気に盛り上がりを見せることになる。

### 3— 鹿兒嶋女隊力戦ノ図

楊洲周延画・篠田仙果詞書 大判錦絵三枚続  
 明治10年4月12日届 久留米大学筑後文化資料室蔵



2—【鹿兒嶋新聞】熊本城戦争図  
 安達銀光画・大田錦詞書 大判錦絵三枚続  
 明治10年3月届 久留米大学筑後文化資料室蔵







4



5



- 4 — 鹿兒嶋婦女子乱暴之図  
 月岡芳年画 大判錦絵三枚続  
 明治10年7月4日届 久留米大学筑後文化資料室蔵
  
- 5 — 【鹿兒島新聞之内】田原坂進撃之図  
 梅堂国政画 大判錦絵三枚続  
 明治10年3月26日届
  
- 6 — 鹿兒嶋征討紀聞  
 楊洲周延画 篠田仙果詞書 大判錦絵三枚続  
 明治10年6月2日届 久留米大学筑後文化資料室蔵



# 大阪における報道

「江戸絵」あるいは「東（あづま）（吾妻）錦絵」との別名があるように、東京の特産品であった多色刷りの錦絵。江戸後期には、京阪わけても大阪で盛んに作られるようになり、「上方絵」と呼ばれ、道頓堀の歌舞伎絵を中心に明治

まで独自の発展をとげた。西南戦争の報道を見ても大阪の場合には、大判一枚の画面に戦況を描いたり、戦争の勇士たちを個別にクローズアップしてシリーズ化したりと、東京の報道とは異なった独特の趣が感じられる。



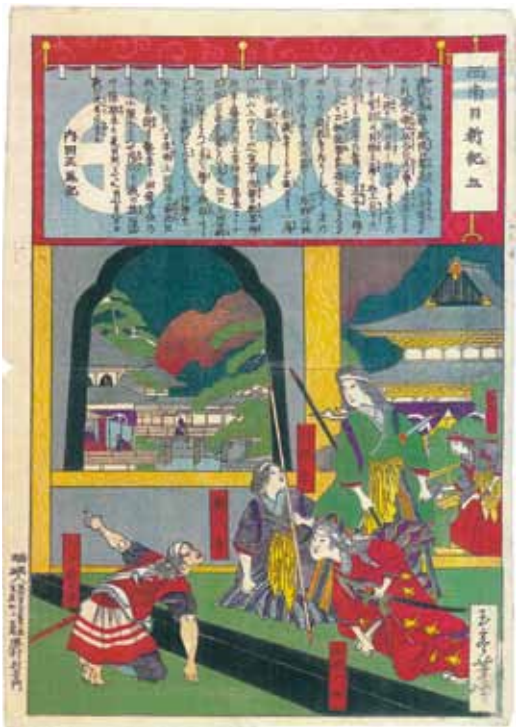
7-1



7-3



7-2



7-4

## 7—西南日新記

玉亭芳峰画・内田正鳳記事（各）大判錦絵  
（各）明治10年（7・8月頃）刊 久留米大学筑後文化資料室蔵（7-3・7-4）

7-1. 第一号 7-2. 第二号  
7-3. 第四号 7-4. 第五号

# 文武高名傳

## 舊陸軍大將正三位西郷隆盛

通稱吉之助 文政四年生

人とあり 夢遊小一

大畧にり 兵を用る

申の如し 始徳川

の逆政を 憤り屢

之を斃ん と謀り

事成を して三度

大島小 瀬とる 故

小自稱 一と大島

三右衛 門と云 嫌

慨止び 安政五 年僧

月照と 身を西 海小投 げ

隆盛死 せび後 本藩の 大参事 と為り 國君久 光を助 け執政 專勤む 英吉

利の事 起る小 及て兵 を勅し 討て之 を退く 慶應元 年参謀 長と為 り遂

幕府を 退り茂 辰廣東 奥北越 の賊を 平け大 不政を 改革し 廢藩立 縣の

制度を 定め陸 軍大將 小昇り 天皇陛 下を奉 して西 州中國 を巡行 以

明治八 年征韓 の論に 依り退 て薩島 の離莊 小在隱 謀を企

存問を 名とし 十年二 月自諱 して新 政大元 帥と号 し大軍

を卒て 官軍と 戦蓋世 の英雄 也惜哉 賊將の 名を蒙 るを

西郷 隆盛 年表

彫 夏

西郷隆盛 大正十一年三月五日 大正十一年三月五日 大正十一年三月五日 大正十一年三月五日 大正十一年三月五日



8-1

8— 文武高名伝  
 鈴木年基画・記事 大判揃物錦絵  
 明治10年5月12日届 (8-4・8-5) 久留米大学筑後文化資料室蔵 (8-5)



8-3



8-2



8-4

- 8-1. 旧陸軍大将正三位 西郷隆盛
- 8-2. 旧陸軍少将正五位 桐野利秋
- 8-3. 旧陸軍少将正五位 篠原国幹
- 8-4. 前原一角
- 8-5. 西郷隆盛室阿香



# 西郷隆盛室阿香

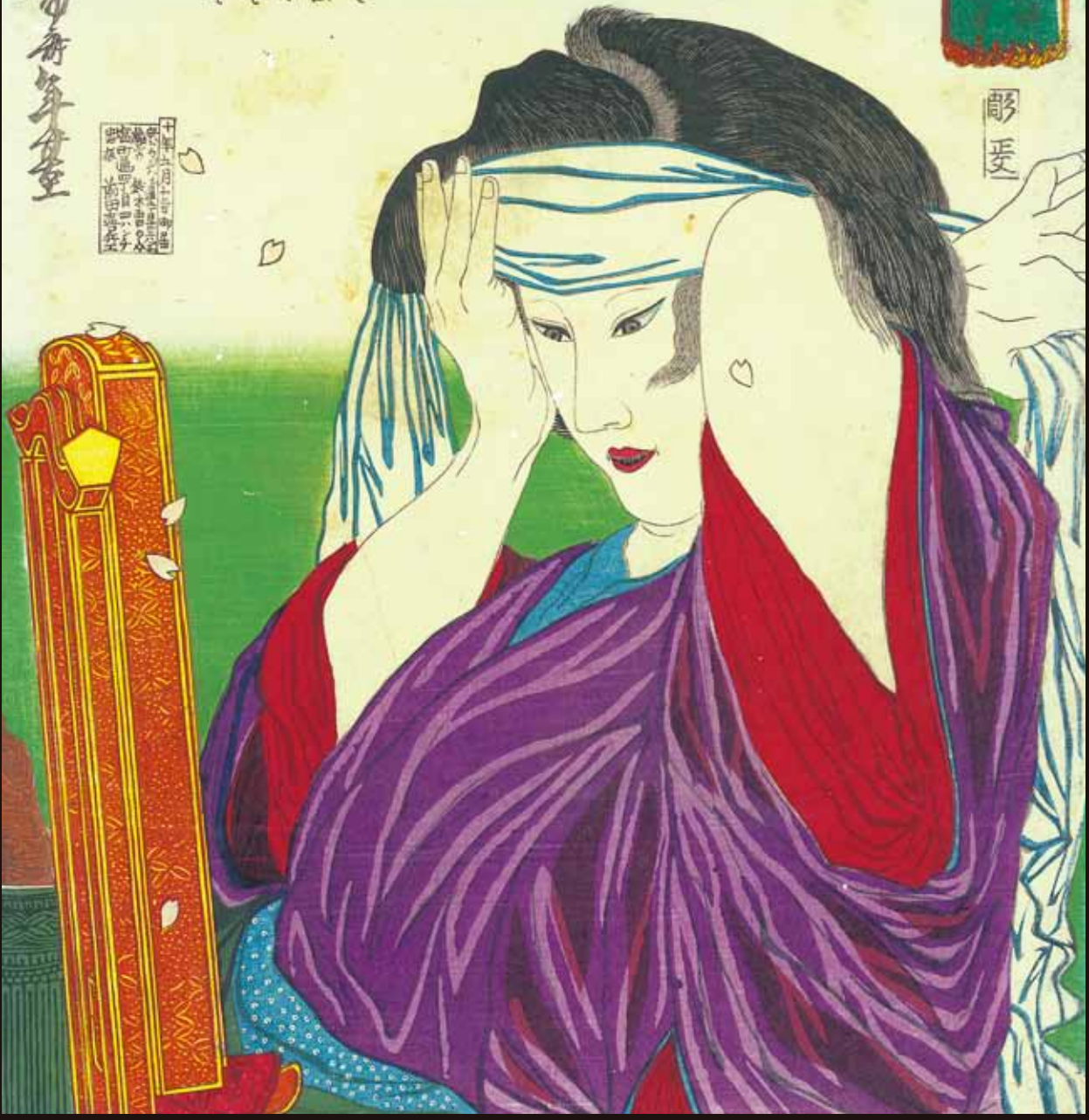
隆盛の妻名を香と云ふ鹿兒島縣士族若山某の女也。隆盛小塚一三男一女を生む幕府の時大隆盛が流罪せらるゝ、小當り隨て大島小在り磯打浪や松風の音のみ施ぬ島影小共小艱苦を共にせし時を以て其國小帰るを得隆盛ハ此の昇り勢小正三位參議陸軍大將に進み一うども一朝の怒小朝廷を退き十年二月兵を九州小舉るや香女ハ同縣士族の婦人中夫死と俱小死とて地下の地とをり恨み女一と決心せり翌婦五百余人を編成し之とが長となり隆盛が軍を補けて陣中にあると云ふ香女本年二十九外り婉小して内極願慈能く和歌を詠せまじ長刀の術小妙を得稀世の英雄たり



西郷隆盛室阿香

西郷隆盛室阿香  
 阿香の事  
 西郷隆盛の妻阿香は鹿兒島縣若山某の女也。隆盛小塚一三男一女を生む幕府の時大隆盛が流罪せらるゝ、小當り隨て大島小在り磯打浪や松風の音のみ施ぬ島影小共小艱苦を共にせし時を以て其國小帰るを得隆盛ハ此の昇り勢小正三位參議陸軍大將に進み一うども一朝の怒小朝廷を退き十年二月兵を九州小舉るや香女ハ同縣士族の婦人中夫死と俱小死とて地下の地とをり恨み女一と決心せり翌婦五百余人を編成し之とが長となり隆盛が軍を補けて陣中にあると云ふ香女本年二十九外り婉小して内極願慈能く和歌を詠せまじ長刀の術小妙を得稀世の英雄たり

阿香





9

## さまざまな報道

錦絵の版元は売らんがために、様々な趣向を凝らして新作を店頭に並べた。大判三枚続おおばんという西南戦の特大ワイド版の錦絵を企画したり、八月に日本に接近した金星に軍服姿の西郷隆盛が見えるとの噂が

たてば、すぐさま「西郷星」の錦絵を売り出したり。戦争も終盤にさしかかる頃には、西郷隆盛の挙兵の理由を、最大限に想像をたくましくして物語に作つたものまで登場して、商業上のねらいは、戦争の虚像をいっそう膨らませてゆく。



10



9—【日向国】三国峠進撃之図

山崎年信画 大判錦絵六枚続  
明治10年8月15日届

10—鹿児嶋暴徒あふむ石 読売新聞六百七十号

守川周重画 大判錦絵  
明治10年4月27日届 久留米大学筑後文化資料室蔵

11—西郷星桐野星

山崎年信画 大判錦絵  
明治10年9月届





12-1



12-2



12-3

12—西郷隆盛夢物語 上・中・下  
笑門舎羽田富次郎画・記事  
(各) 大判錦絵二枚続  
明治10年9月3日届

## ■戦争の終結

明治十年九月二十四日午前四時に開始された城山総攻撃も、午前九時にはまったく静けさを取り戻し、西南戦争は終末をつげる。政府に不満をいだく庶民たちは、西郷軍が掲げる「新政厚德」の旗印に淡い期待も抱いたが、延岡の陣営を失った八月には、勝敗はすでに決まっていた。西郷軍の敗北を早くも確信した版元のなかには、速報性がものを言う販売競争に勝つために、前もって戦争の終結を描いた錦絵を準備する者もあった。絵師の想像は、諸隊の降伏、西郷の死、首実検、あるいは凱旋の祝宴などに及び、さまざまなかたちで戦争の終末が描かれることになる。



13—【鹿兒島鎮定】首実檢之図

月岡芳年画 大判錦絵三枚続

明治10年11月5日届 久留米大学筑後文化資料室蔵



14



15

15— 西郷隆盛討死之図

鈴木年基画・詞書 大判錦絵三枚続  
明治10年 8月15日届・同 9月刊

14— 日隅近傍戦図

鈴木年基画・詞書 大判錦絵三枚続  
明治10年 8月15日届・同年 9月刊

## ■暮らしへの浸透

明治から昭和にかけての劇作家・小説家の岡本綺堂（一八七二—一九三九）は、幼い頃を回想して、竹の皮で船の形を作った西郷鍋という玩具や、西郷糖という菓子を子供相手に商う物売りが家々をまわっていたことを記している（「思ひ出草」）。西南戦争は人々の生活のすみずみにまで息づいていたようである。戦争が終結したのちも、悲運の最期をとげた西郷をはじめ薩軍の勇士たちは人々の記憶から消えさることはなく、戦争にちなんだ子供向けの玩具絵、あらためて戦争の全容をふりかえる錦絵や小説、あるいは歌舞伎が作り続けられた。



16—延岡陣営図・延岡山中之図  
大山鞠問の図・米蔵ヨリ城山を攻  
梅堂国政画 大判錦絵  
明治10年11月21日届

17—鹿兒嶋戦争記  
進齋年光画 大判錦絵三枚続  
明治10年12月28日届



17

六双陣凱



嶋兒鹿



東京日本橋通壹町目十九番地大倉孫兵衛梓



18— 鹿兒嶋凱陣双六

月岡芳年画 錦絵 60.1cm × 73.0cm  
明治10年12月17日届

19— 鹿兒島平定寿語録

月岡芳年画 錦絵 74.0cm × 71.7cm  
明治10年12月7日届

20— 西南勇士集

画者未詳 扇面銅版画 天地14.6cm、上弦47.6cm、下弦21.0cm  
(明治10年頃) 刊 久留米大学筑後文化資料室蔵

21— 熊本近傍戦争之図

画者未詳 扇面銅版画 天地14.1cm、上弦45.2cm、下弦18.3cm  
(明治10年頃) 刊



袋 18-2



20



21



22



23

24— 西郷腹中之図  
画者未詳 豎大々判錦絵  
(明治後期) 刊 久留米大学筑後文化資料室蔵

25— 西郷隆盛妻服中之図  
画者未詳 豎大々判錦絵  
(明治後期) 刊 久留米大学筑後文化資料室蔵

22— [西南雲晴朝東風役者絵]  
豊原周画 大判錦絵三枚続  
明治11年2月26日届

23— [西南雲晴朝東風役者絵]  
楊洲周延画 大判錦絵三枚続  
明治11年届



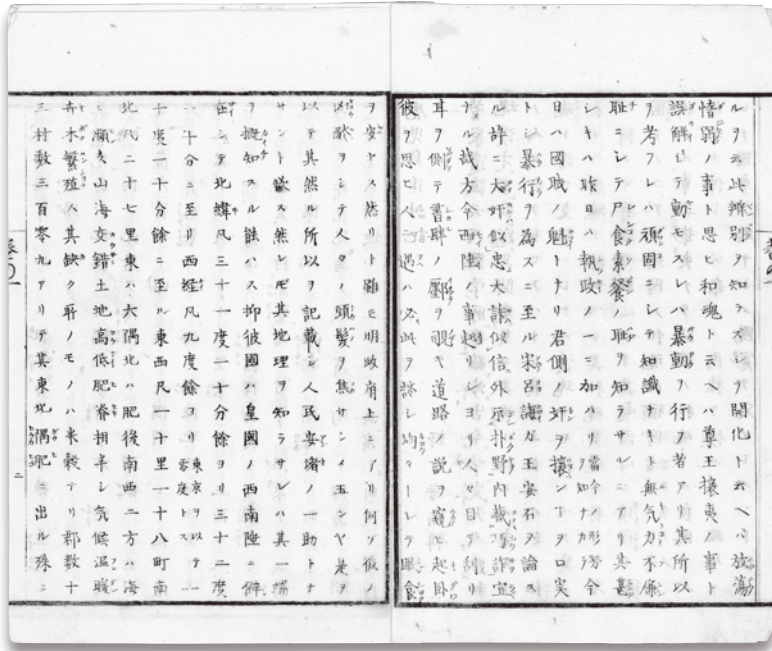
24



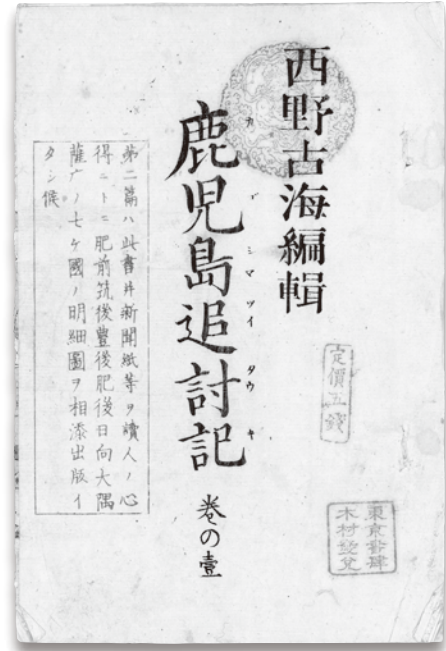
25



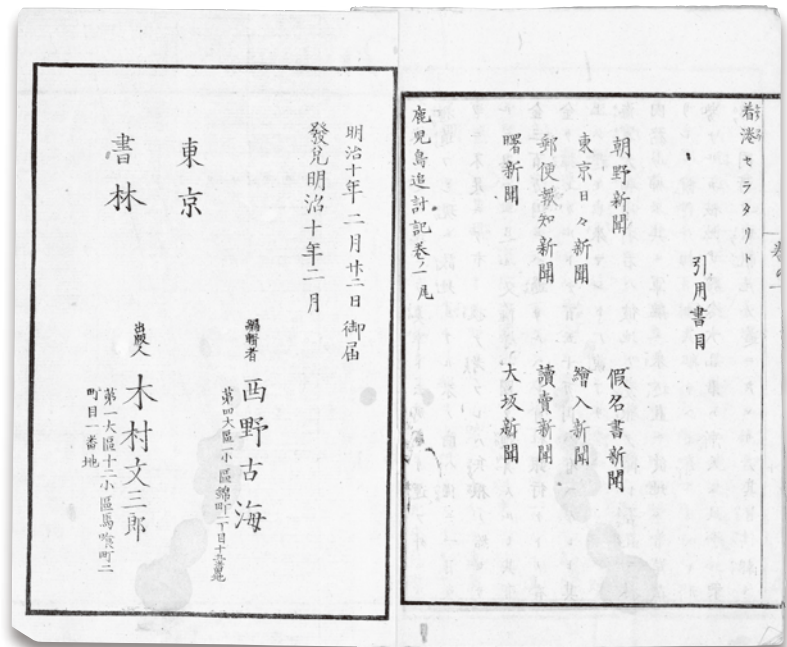




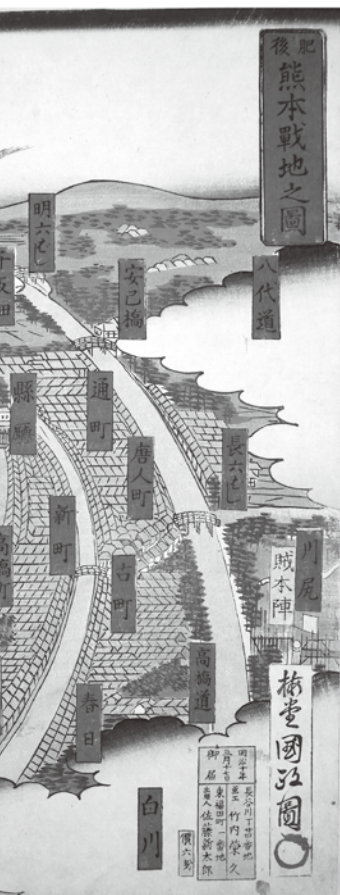
1-2



1-1

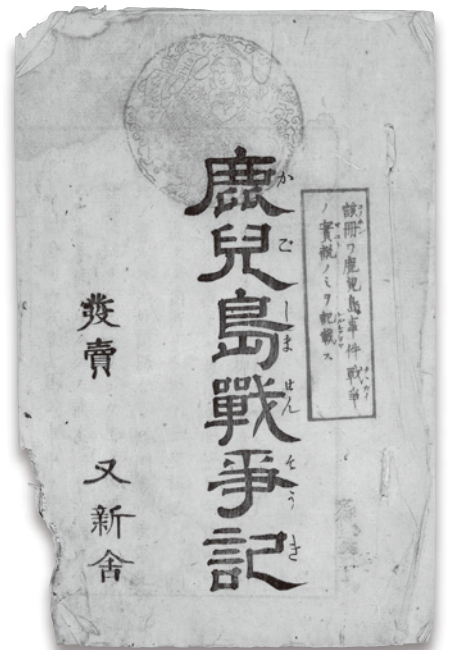
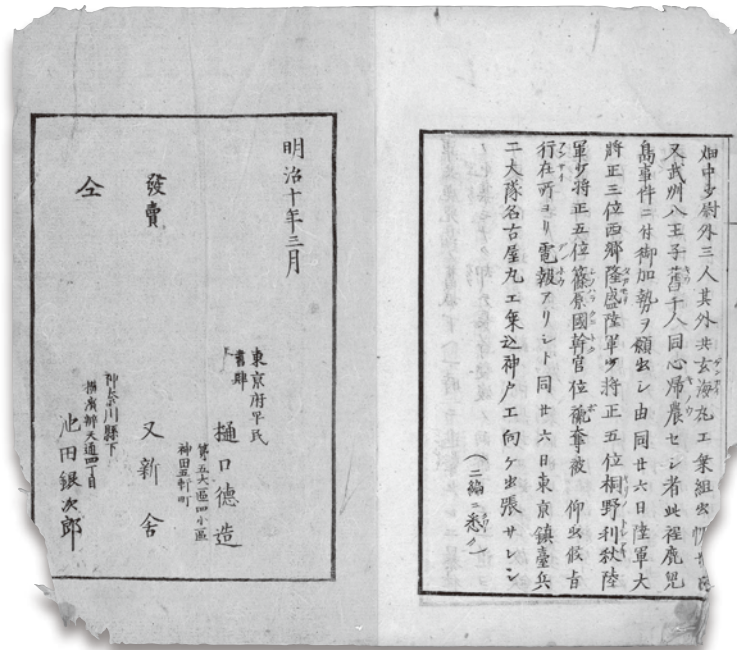


1-3



3

- 1 — 鹿兒島追討記  
西野古海編 半紙本一冊  
明治10年2月22日届・2月刊
- 2 — 鹿兒島戦争記  
樋口徳造編 半紙本一冊  
明治10年3月刊



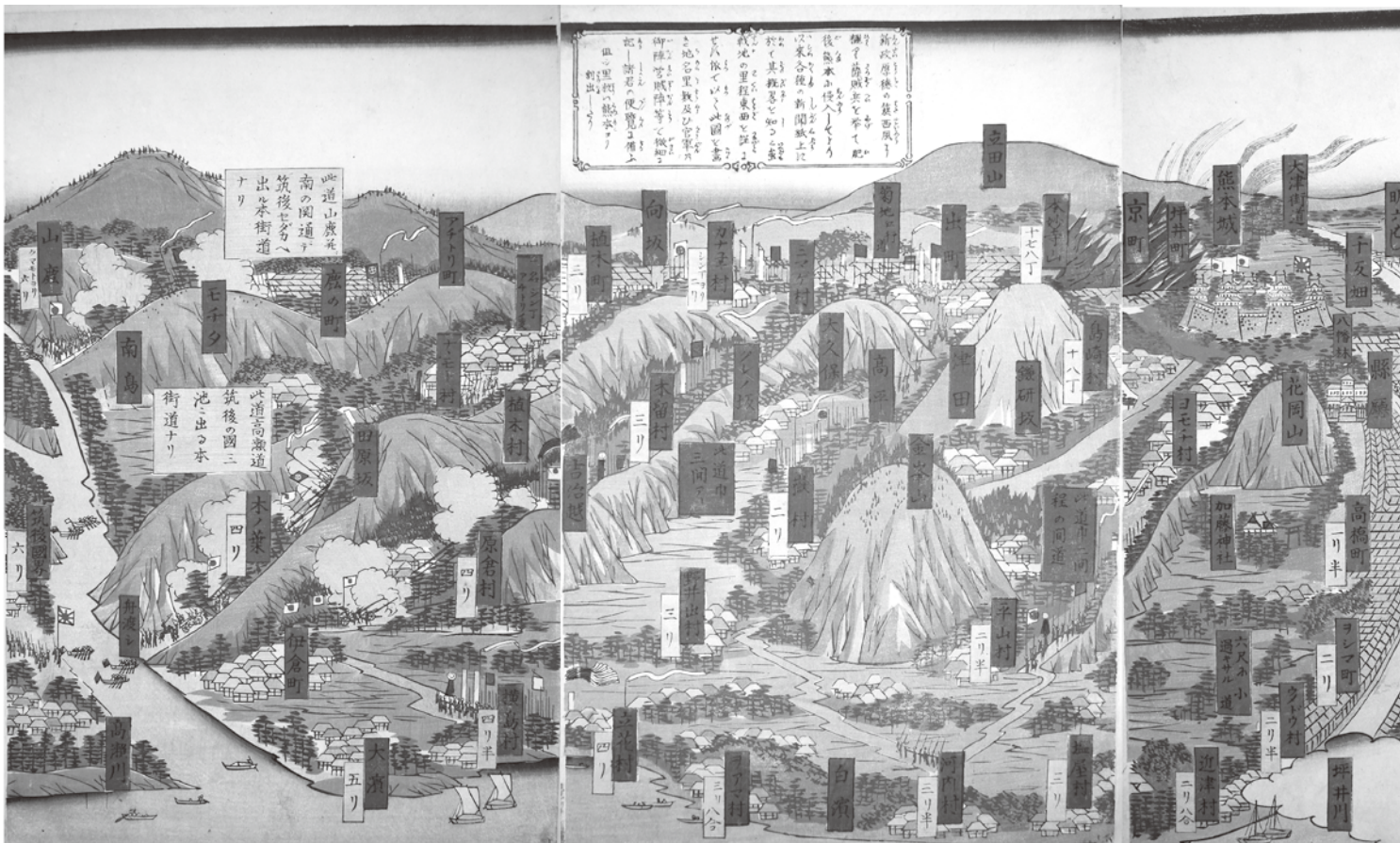
2-2

2-1

3—【肥後】熊本戦地之図

梅堂国政画 大判錦絵三枚続

明治十年3月17日届 鹿兒島県立図書館蔵





4— 西南征討全記

進齋年光画 大判錦絵三枚続  
(明治10年)刊 久留米大学筑後文化資料室蔵

5— 鹿児島戦記

篠田仙果編 中本六冊(初編-三編)  
明治10年2月26日届

6— 【鹿児島記聞内】 賊兵激戦之図

山崎年信画・寿々喜詞書 大判錦絵三枚続  
明治10年4月5日届 鹿児島県立図書館蔵







7—【薩州】鹿兒嶋大進撃之図

山崎年信画 大判錦絵三枚続  
 明治10年9月18日届 久留米大学筑後文化資料室蔵

8—鹿兒嶋軍記

大西庄之助編 中本三冊(初号-三号)  
 明治10年3月22日届

9—鹿兒嶋県有のそのまゝ 二号

画者未詳 大判錦絵  
 明治10年3月6日届・同年3月刊





10— 薩摩大戦記

鈴木年基編・歌川芳景画 中本六冊（活版）  
明治10年刊

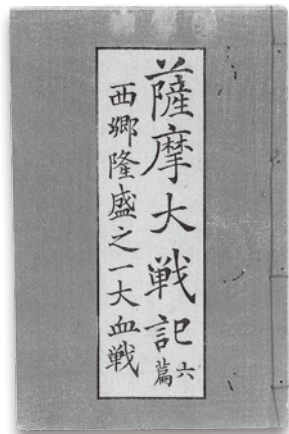
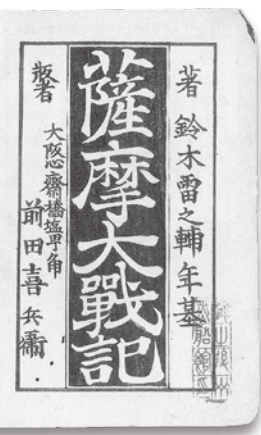
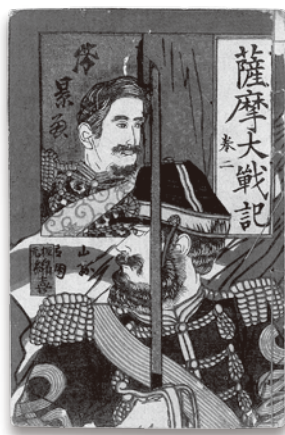
11— 薩日略軍記

うきよ年光画・内田正風詞書 大判錦絵三枚続  
明治10年9月1日届  
久留米大学筑後文化資料室蔵

12— 有名十八史略

鈴木年基画・記事 大判揃物錦絵  
明治10年10月12日届

11



10



桐野利秋 12-2

西郷隆盛 12-1



西郷隆盛の伝

一 西郷隆盛

鹿児島縣士族

西郷隆盛

西郷隆盛は元吉之助と稱し

号を南洲と云嘉永元年

間勤王を唱て京師に

入り僧

忍向

依り

争知地

正治(海江田信義)等と

謀り大に為事有んとするの際

幕府逮捕の手を下す依り隆盛忍向を伴ひ

九州に走り投海の約を成せし隆盛は僅に廻り

忍向に回らざる藩其物議を憚り文を大島に流す文久三年

藩政に參與し戊辰の春東征の參謀となる明治二年東京城を収

同六年陸軍大將に移る十月征韓論象議と合はざるを以て辞

朝廷許さざるをもて之を資し郷邑に於て私學校設け其少年輩と進退方向を定む

且其資望のある旧知事より優まり然る此一輕舉の

暴動有ら何事ぞや





13-3



13-4



13-2

13—【明治十年】戦士銘々伝

中井芳滝画・池田伝兵衛記事 中判揃物錦絵  
(明治10年) 刊

- 13-1. 西郷隆盛
- 13-2. 桐野利秋
- 13-3. 篠原国幹
- 13-4. 逸見十郎太



13-6



13-5



13-7

- 13-5. 淵辺高照
- 13-6. 西郷小平
- 13-7. 村田三助
- 13-8. 西郷隆盛ノ妻
- 13-9. 西郷隆盛ノ女
- 13-10. 谷干城君ノ室沢君
- 13-11. 亡種田少将君ノ側妾小勝



13-9



13-8



13-11



13-10







15



16

16— 西郷隆盛戦死ノ図  
 細木年一画 大判錦絵三枚続  
 明治10年10月6日届



15— 薩賊暴戦一覽  
 長谷川真信画 大判錦絵三枚続  
 明治10年7月25日届



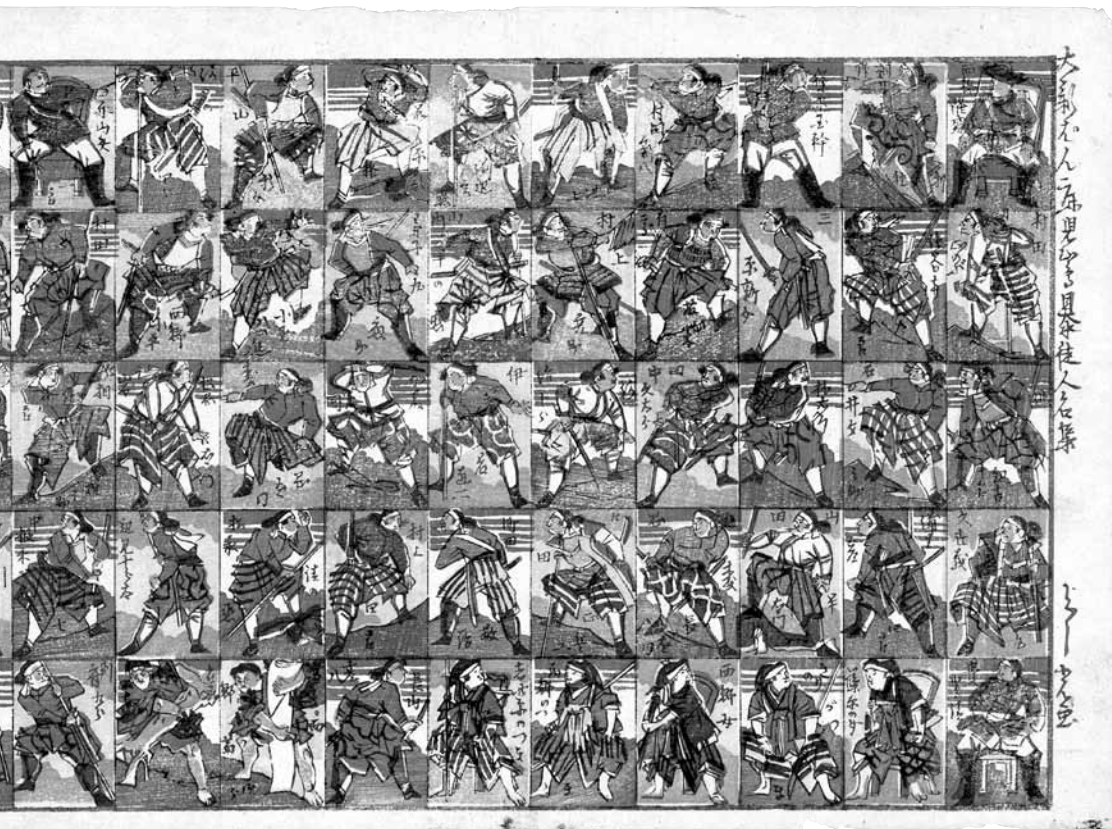




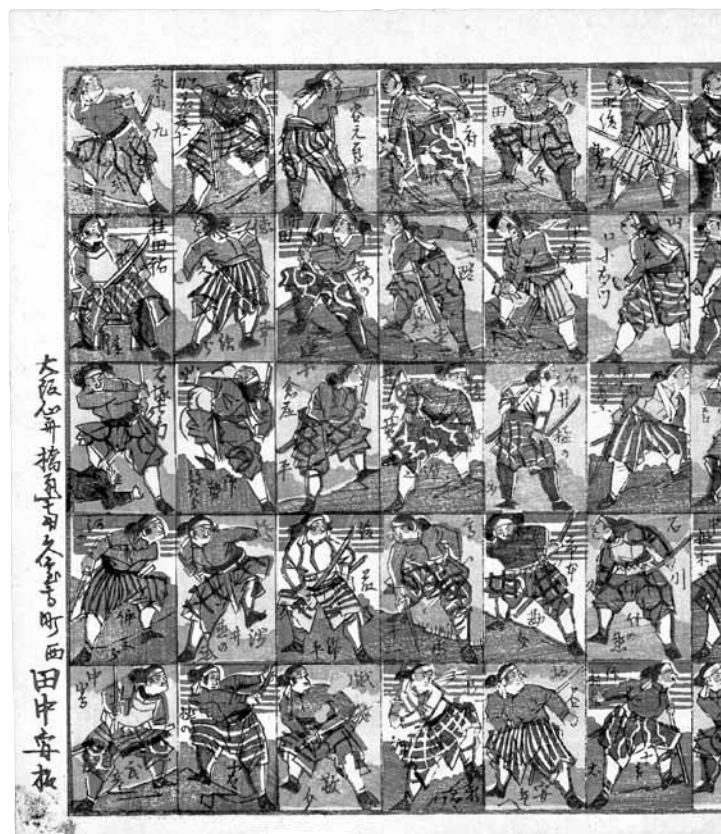
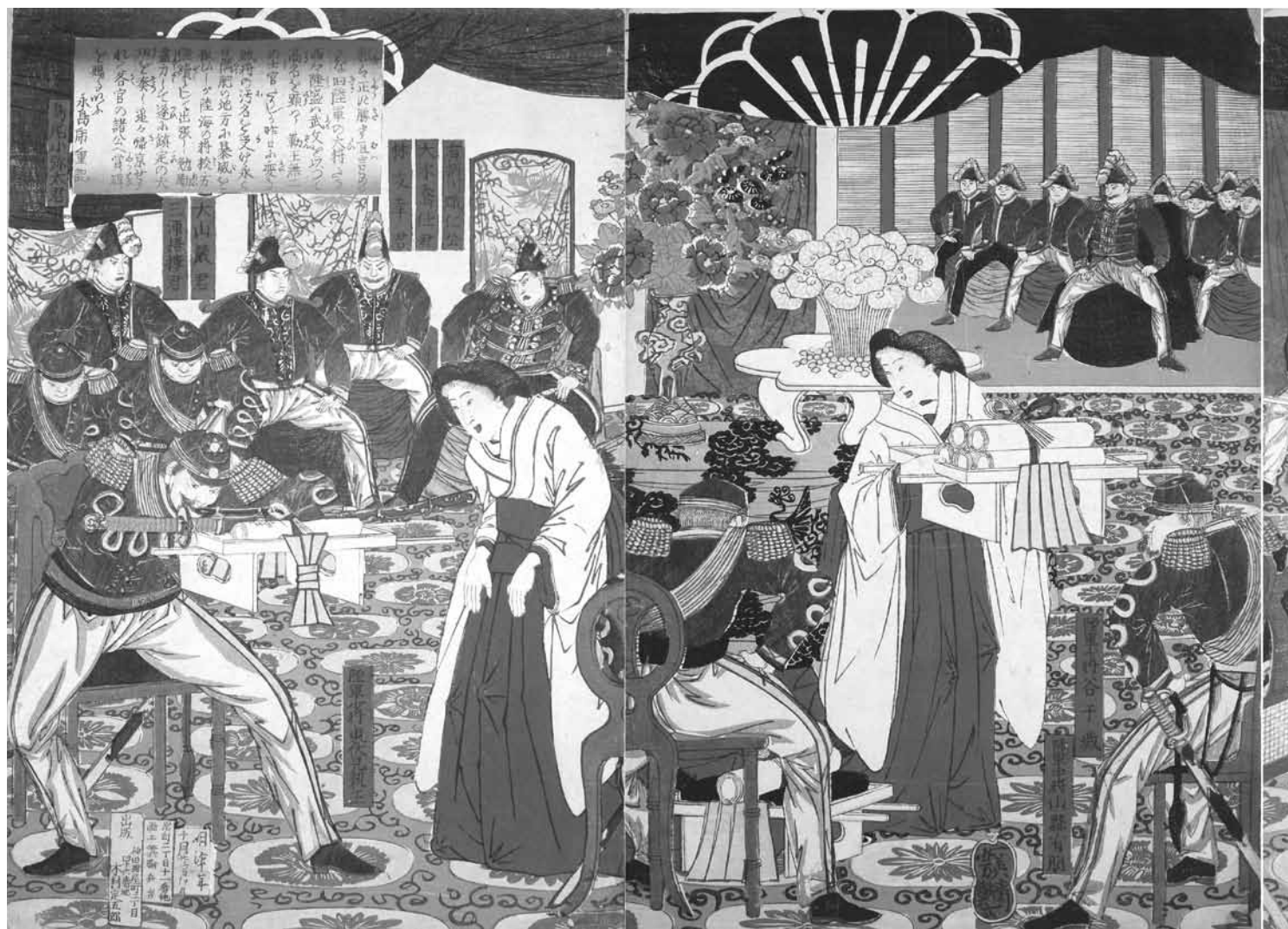
17—西南鎮定賞賜図

一英齋歌川芳艶画・永島虎重詞書 大判錦絵三枚続  
 明治10年10月26日届

17

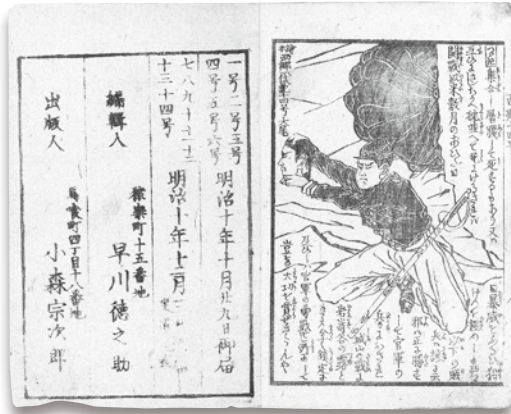


18



18—大新ばん鹿兒嶋暴徒人名集  
よし光画 大短冊判錦絵  
(明治10年頃) 刊





九号-十四号 19-2

19—【絵本】西郷一代記  
早川徳之助編・松月保誠画 中本十四冊  
明治10年10月29日・12月3日届



20—西南雲晴朝東風 百姓作蔵住家の場  
豊原国周画 大判錦絵三枚続  
明治11年3月届 鹿児島県立図書館蔵

21— 明治英名百詠撰  
 篠田仙果編・生田芳春画  
 中本一冊  
 明治12年10月18日届・11月刊

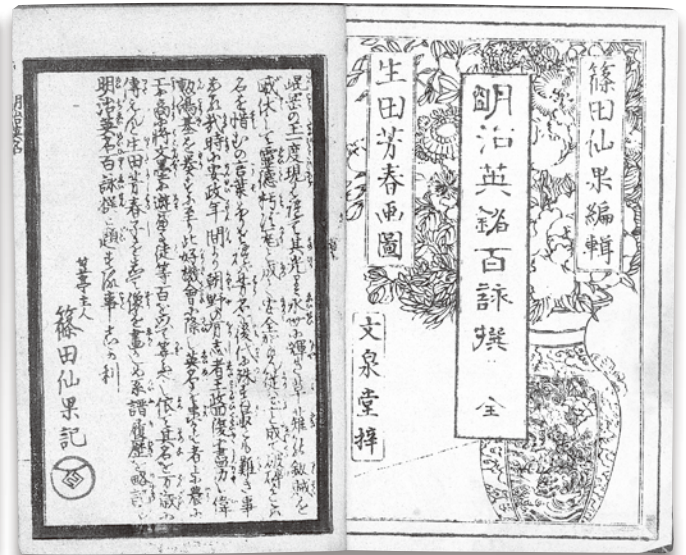
22— 【現今】英名百首  
 沼尻絰一郎編・鮮齋永濯画  
 中本一冊  
 明治12年7月16日届・明治13年2月20日刊



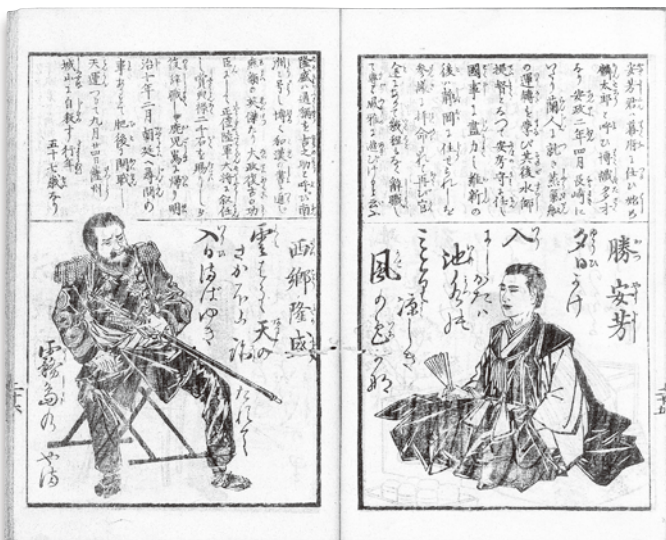
表紙 21-1



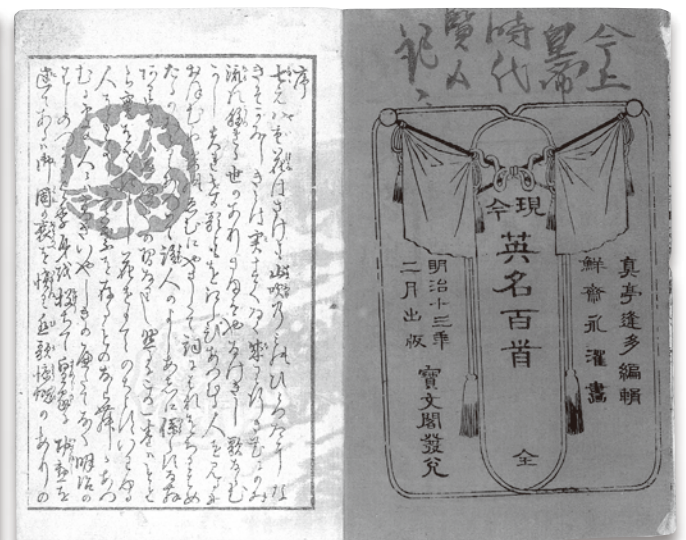
21-3



見返 21-2



22-2



見返 22-1



参考資料

作品解説

西南戦争関連年表

参考文献

作品目録

越野

楊洲周延「鹿兒嶋征討紀聞」(部分)

新嘉坡  
出版人 鈴木

# 作品解説

記載順  
作品名——頁数  
作者名  
届出・版行年代  
出版者  
所蔵（記載のないものは個人蔵）

1

## 【新聞】鹿兒島事情

——大判錦絵三枚続

小林清親画

明治十年二月十九日届

〈東京〉武川清吉

（詞書）

馬車、人力車の往返に、其轟は雷かと思はれ、稲妻よりも瓦斯燈の光り尊き開化の御代、去る一月廿一日とか、三菱会社に名も高き、心の内も赤龍丸、鹿兒島県下の桜島、其向ふなる製造所より、彼弾薬を積みこまれ、尚本月一日とかや、残る弾薬積み込んど、気はせきたんの用意の折から、不意に士族の押寄せ来り、彼弾薬を悉く、運び返せと争ひの、心の程も蒸気せん、併し決して弾薬を、奪ひ取りたる事はあらずとかや。何れ近きに鎮静の、色どり見せしも風説の、信じがたきを画がくとしかいふ。

丑のはる

角書（画題の上に記された、冠称と呼ばれるもの）の「新聞」の文字が、時事報道的錦絵であることを示している。西南戦争の近因となった赤龍丸事件を描いた本図

は、所見の範囲では、もつとも早くに出版届けを済ませている「西南戦争錦絵」の一つである。詞書の文章は、「気はせきたん」（「気が急ぐ」に「石炭」を掛ける）や「心の程も蒸気せん」（心が「上気せん（む）」に文明開化の象徴の一つである「蒸気船」を掛ける）など、江戸時代以来の戯作（小説）調で小気味がよい。文末には、「風説の信じがたきを画がくとしかいふ」とあり、事件の確証を得ないまま、錦絵に仕立てていたことが知れる。「丑のはる」とは、本図が描かれた明治十（丁丑）年の春のことをいう。絵師の小林清親（一八四七—一九一五）は、明治期を代表する浮世絵師。この時期、方円舎清親とも号した。河鍋晩斎や柴田是真に師事したほか、西洋画や写真技術も学んで独自の画風を完成。光と影を繊細にリアルに捉えた光線画が有名だが、画業はあらゆる分野にまたがり、本作のような報道錦絵の作品も多い。（生住）

2

## 【鹿兒島新聞】熊本城戦争図

——大判錦絵三枚続

安達銀光画・大田錦詞書

明治十年三月届（日付なし）

〈東京〉福田熊次郎

久留米大学筑後文化資料室

（詞書）

連戦弾丸を飛して必死を究め、暫時炮撃なし、熊本城に官軍と戦ひ、黒烟天に漲り、砲声地を裂んと疑ふ。暴徒は突然として、一手の兵を起せしが、弥官軍進撃なし、城の傍らに討しらせし、

暴徒敗走に至り、兵器を打捨、散々に体を引退きけるとなん。

編輯 大田錦誌

明治十年二月二十一日の夜半から二十二日の未明にかけて、薩軍は鎮台（政府の陸軍軍事機構）が置かれる熊本城を包圍襲撃した。鎮台司令長官谷干城が指揮する官軍の堅い防禦に苦戦し、薩軍は熊本城長圍策に変更、以後、田原、鳥巢、植木、木留の各地で激しい攻防戦が続くことになる。本作は、ちょうどその頃に描かれた、比較的早い時期の西南戦争錦絵。対峙する両軍を薩軍側から見て、西郷隆盛の号令のもとに発せられた砲弾が、城郭あたりに命中した瞬間をとらえる。遠景の木立の後ろに赤いぼかしを引くのは、時刻が明け方であることを示す。絵師の安達銀光（のち吟光と改名、生没年未詳）は、本作のような報道画のほかに、美人画、役者絵、名所絵など数多くの作例が知られ、明治期、東京で活躍する浮世絵師の一人であった。詞書を書いた大田錦については知るところがないが、あるいは東京の錦絵新聞の記者であろうか。（大庭）

3

## 鹿兒島女隊力戦ノ図

——大判錦絵三枚続

楊洲周延画・篠田仙果詞書

明治十年四月十二日届

〈東京〉松下平兵衛

久留米大学筑後文化資料室

（詞書）

唐土の石龍夫人、わが朝の巴、はん額、いづれも男

子に増れる勇あり。  
戊辰の年、会津の役に女  
隊ありしと聞及しが、  
今般、鹿ごしま陣中に  
も、勇婦数名交は  
り居り、戦かひの機を  
斗り、緑りの髪を振  
みだし、長刀あるは小  
太刀をふるて、飛来る  
弾丸の下をくゞり、秘  
術を尽し、激戦なす。其  
さま、左ながら牡丹に狂ふ胡  
蝶にも譬ふべし。但し、虚  
実は保証しがたし。

#### 柳々子仙果記

薩軍の妻たちが女隊を結成し、鹿児島県下の政府高官  
の家に押し入ったことを報じる新聞記事は、ともすれば  
戦闘シーンを描いて紋切り型になりがちな西南戦争錦絵  
に、新たな題材を提供する。浮世絵師たちは想像をふく  
らませ、女隊が戦場で奮闘するという虚構の場面を、美  
人画のように艶やかに描いた。本図はその典型であり、  
「佐阿こひ」（さあ来い）、「津宵こと」（強いこと）、「山  
上あれ」（参上あれ）、「嶋ず千代」（島津千代）などと、  
語呂合わせの名前を付けた四人が戦う姿は、歌舞伎の立  
回りのように様式化されていて、いかにも空想画といっ  
た感じである。二枚目上部、柳々子篠田仙果の詞書にあ  
るように、戊辰戦争において、会津藩士の妻子が組織し  
た婦女隊や娘子軍も、薩軍に女隊ありとの連想をうなが  
したのであろう。絵師の楊洲周延（一八三八一—一九一三）は、  
幕末から明治期の浮世絵師。はじめ歌川国芳、三代歌川  
豊国に、のち豊原国周に学ぶ。特に美人画で人気を博し、  
そのほかにも報道画、役者絵、小説の挿絵など画業はい

たつて広く、明治を代表する浮世絵師の一人。詞書を担  
当した篠田仙果は、明治期の戯作者。西南戦争に強い関  
心を寄せ、開戦当初から事態の推移を小説につづった草  
双紙『鹿兒島戦記』（参考図版5）の著もある。（大庭）

4

#### 鹿兒嶋婦女子乱暴之図

大判錦絵三枚続

月岡芳年画

明治十年七月四日届

〈東京〉松村甚兵衛

久留米大学筑後文化資料室

（詞書）

薩賊等、兼て功名を以て、  
人心を扇動せしゆへ、政府  
を見ること仇敵の如し。曾て  
婦女子等大勢奇集り、当  
時政府の頭官に奉職する  
人々の家へ押し寄せ、家屋を  
破却し、乱暴を極めしこと、  
十数軒に至れりとなり。  
婦女子迄、かく暴動する、  
実に賊徒等の所業、悪  
べきの至りなり。

薩軍の女隊を描いた錦絵のなかでも、本作は新聞報道  
に忠実にそつて、女性たちが集結し、今まさに県下の政  
府高官の家に押しよせようとする場面を描く。腹ごしら  
えのための炊き出し、武装した老女、「女隊」と書かれ  
た幟旗など、さまざまな要素を加えながら、陰影を強調  
した洋画風の描写に全体をまとめることで、臨場感あふ  
れる画面を構成している。絵師の月岡芳年（一八三九—

一八九三）は、歌川国芳の門人で、幕末から明治の浮世  
絵界を代表する人物。各種の錦絵、絵本や小説の挿絵な  
ど画業は幅広く、多数の門人を育成した。本書にも収録  
する進齋年光、鈴木年基、山崎年信らも彼の弟子であり、  
西南戦争錦絵流行の一翼は、芳年の門流によって担われ  
ていた。（大庭）

5

#### 【鹿兒島新聞之内】田原坂進撃之図

大判錦絵三枚続

梅堂国政画・詞書

明治十年三月二十六日届

〈東京〉沢久次郎

（詞書）

鹿兒島暴徒を追  
討の官軍数功の  
そのなか、野津兄弟  
の戦功は、新聞上  
にて知られたり。田原  
坂の激戦に、桐野が  
為になやまされ、  
兵卒苦戦の其折  
に、野津中佐は真先  
に進み、兵を指揮なし  
たる、其勇猛の比類  
なきは、頓て鎮撫の  
その後、末世の  
人の茶話に  
残らん。

梅堂永久記



本作は、西南戦争の中で最も熾烈をきわめた、田原坂の戦いを描いたものの一つ。田原坂は、熊本県熊本市植木町豊岡一帯の地名。この戦いは十七昼夜におよぶ壮絶な戦いで、一日の弾丸使用量は三十二万発といい、双方から放たれた弾丸は空中でかち合うほどであった。画面中央に騎乗の賊兵が描かれているが、そこには「桐野利秋」の名が記されている。桐野利秋は、幕末には「人斬り半次郎」として恐れられた、西郷隆盛の右腕的存在で、四番大隊長として西南戦争に臨んだ。画面の左前方で桐野利秋と一騎打ちを見せるのが「野津中佐」で、その奥には「野津少佐」なる官兵も描かれている。だが、これらは誤りで、第一旅団長野津鎮雄は少将、第二旅団参謀長野津道貫は大佐である。この野津兄弟は薩摩の生まれ。皮肉にも、同郷人と刃を交えたこの西南戦争で、二人は名声を得たのであった。絵師の梅堂国政（一八四八—一九二〇）は、本名竹内栄久。この時期四代国政を称して、後に三代歌川国貞を襲名する。初代国貞、二代国貞に師事した。役者絵を得意としたが、開化絵も多く残している。（生住）

### 6 鹿児島征討紀聞

大判錦絵三枚続

楊洲周延画・篠田仙果詞書

明治十年六月二日届

〈東京〉鈴木記

久留米大学筑後文化資料室

#### （詞書）

散ればこそ、いとゞ目出た

き桜嶋、夫に助力といさ

ましく、薩摩そだちの

女武者、花の笑顔に

引かへて、櫻きはち巻り  
しく整装、得もの携  
さへ官軍と、激戦なせし  
も数度なりしが、ある時  
小船にうち乗りて、官船  
に近づきより、数刻大ひ  
に戦ひけるとぞ。

柳々子

3 「鹿児島女隊力戦ノ図」と同じく、周延と仙果のコンビによる作。官軍と戦う女性たちに「越野柳」（美人の形容「柳腰」の擬名）、「円出おと子」（まるで男の擬名）、「筋梨おさつ」（道理に合わない意の「筋無し」と「薩摩」を合わせた擬名）と戯れた名前を付け、背景に小さく西郷隆盛ら薩摩の姿を添える趣向だが、構図や配色は本作の方が出来映えがよい。（大庭）

7

### 西南日新記

（各）大判錦絵

一号・二号、四号・五号

玉亭芳峰画・内田正鳳記事

（各）明治十年（七八月頃）刊

〈大阪〉勝村利右衛門

久留米大学筑後文化資料室（四号・五号）

#### （一号記事）

却説、西郷隆盛は、日州都の城近傍にて、蒲生といふ所に潜匿す。序より五り斗りあり。よつて、六月廿九日衆儀一決して、高島少将旅団は、同日仏暁より数千の兵を引率して、整々どぶくの勢ひにて出発し、みやこの城に向ひて進撃なす。

曾我少将旅団、共に蒲生、吉田を攻め、げきなさんと進発し、つゞいて都の城を目的に進入す。

○六月廿四日未明より、官軍は汽船にて、一手は脇山より、一手は谷山より進撃、いまだ汽船より悉く上陸しへざるに、已に開戦となり、賊軍も炎暑のいとひなく、炮声の中より突出し、此所を千途と防戦す。此手の賊將池部吉十郎は、逸見十郎太を伴ひ、肥後の国水俣、矢筈山辺より近傍奔走せしに、今此戦將にて奮戦す。官兵には益々勇威盛んに、敵三十余人を斃し、尚す、んで山上の塁を拔たりとぞ。

内田正鳳記

#### （二号記事）

ついで、官軍進撃、此峠より鹿児島に下らんと、巡查隊五百名計り、賊軍と火花を散らして戦しが、地の利悪しく、やゝもすれば苦戦といふ所へ、別手組駆来り、死生を不論突入、奮戦す。此役、久留米土族西田某、水野氏両雄は、赤はだかにて精兵すぐつて、百余名引連れ先鋒に進み、奮激突戦す。此勢ひに賊、壁易なし、大に敗走したり。台場七ヶ所まで陥入たり。尚又、官軍一手は、二本松を目的に進撃す。賊將には池部吉十郎、辺見十郎太等、此所に現らわれ彼所にかくれ、防戦す。尚薩賊の中、緋おどしの鎧を着し、馬上にて指揮をなす將、姓名つまびらかならず。勇氣盛んの官軍勢も、今賊軍の憤戦に暫し足を止め、山頂の塁壁のり取らんと、一手に勢ひ

を分ち攻のぼる。賊は常に序下へ向け砲射する砲台、是第一の要所と必死となりて激戦す。日も西山に没す。依て軍止めたり。此たたかひ、肥筑界の戦ひ、此方第一の戦争なりとぞ。

#### 内田正鳳記

#### (四号記事)

却軍軍は、日々に進み、鹿兒島里でい

わづか三四里にして、二本松と唱る所迄

押掛せしが、賊軍は今朝よりの追々軍

につけ入れられ、池部、辺見将として、川玉甫助、

竹下九良、有馬源五郎、伊集院権右衛門等、

踏止まりて、此処を千途と防戦す。中にも、

村上九良兄弟は、雨の如く霰の如く飛

来る砲丸、こと共せず、右に潜り左にぬ

け、千変万化と必術を尽くして、動らきを

なす。され共、数か所の傷を負ひ、後しる

を見かへれば、官軍勢に雲珠巻如く路を

立切られ、しよせん掃陣かなわずとや思

ひけん、堅横に攻て廻り、遂に討死をし

たりしとぞ。依て此処を賊徒は、二本松

改ため、二人松と賞したりとぞ。

○七月四日、同国重岡口柳ヶ瀬の左

翼より、賊軍淵辺彦二、重久七之助、村田

平助等、先鋒に進む。官軍前後より包

まんと之を撃つ。賊退いて黒出峠の味方を

合し、急に城の越に迫り防戦す。未まだ

勝負決せずと云々。

#### 内田正鳳記

#### (五号記事)

鹿兒島県下賊徒の妻妾は、主夫、過日より

日州路の嶮山幽谷に立籠り、遠路にはな  
るゝに、就而は聊の志しを通ず事もかなわず、  
今日会計の目的も薄く、此上は九牛の一  
毫成とも官軍に当らんと、先去より県下  
にて夜々刀剣銃器なぞ携へ、宦兵と見るより  
切てかゝり、銃殺なしたりしが、いよいよ身の  
寄り所もなく大に窮うし、原野山林  
に集り衆議なせしかど、過日より一層  
警備嚴重なりしとぞ。

○園山上ウヒラ山へ官軍防禦の配置の際、

賊軍藤田武一、川上芳伸等隊長として、

其勢百余名襲をひ来る。江口、上田中尉

の六小隊まもつて是を撃ち、賊敗してし

りぞく。依而戦ひを止め、もつぱら防禦す。

明れば九月八日未明、上田隊の前面に

賊八十名計り襲来り、田辺中佐の

手五小隊をもつて防戦中、賊の援隊、四

中隊駈来る。是日州にて九月七日八日の

戦ひ、次号に告る。

#### 内田正鳳記

大阪で制作された錦絵新聞。都城方面における攻防戦  
と、官軍方の久留米士族の活躍（一・二号）、二本松で自  
刃した村上武二郎・九郎兄弟のこと（四号）、鹿兒島県  
下の女隊による暴動（五号）などを、比較的詳細に報じ  
る。各号、届出の記載は、日付の部分が空白になってお  
り、素早く次々に制作されたことを思わせている。絵師  
の玉亭芳峰は、明治中期頃、大阪朝日新聞の挿絵を担当  
した浮世絵師として知られる。洋画風の樹木や岩の表現、  
腕を切られる凄惨な場面などには、月岡芳年とその門流  
の影響が見られるが、全体として描写は稚拙である。

#### (大庭)

8

文武高名伝——(各) 大判錦絵

西郷隆盛・桐野利秋・篠原国幹・前原一角・

西郷隆盛室阿香

鈴木年基画・記事

明治十年五月十二日届(前原一角・西郷隆盛室阿香)

(大阪) 前田喜兵衛

久留米大学筑後文化資料室(西郷隆盛室阿香)

#### (隆盛記事)

通称吉之助、文政四年生る。人と為り豪邁にして大  
略あり。兵を用る、神の如し。始徳川の逆政を憤  
り、屢之を斃んと謀り、事成ずして三度大島  
に流さる故に、自称して大島三右衛門と云、慷慨  
止す。安政五年、僧月照と身を西海に投ず。隆盛  
死せず。後本藩の大参事と為り、国君久光を助け、  
執政専勤む。英吉利の事起るに及て、兵を勸  
し、討て之を退く。慶応元年、参謀長と為り、遂に  
幕府を退け、戊辰歳、東奥北越の賊を平げ、大に  
政を改革し、廢藩立県の制度を定め、陸軍大将に昇  
り、天皇陛下を奉じて西州中国を巡狩す。明治八年、  
征韓の論協す。退て鹿兒島の離荘に在、隠謀を  
企、尋問を名とし、十年二月自諧して、新政大  
元帥と号し、大軍を率て官軍と戦。蓋世の英雄也。  
惜哉、賊將の名を蒙るを。

#### (桐野記事)

元中村半二郎と称す。俊傑英断、性險約質朴、佳  
美を好ず。田中幸介を師とし学ぶ。旧藩の時、主君  
の命に依り、国老平田を殺し、遁れて肥後に住す。  
後召還され、勤王攘夷の説を主張し、甲子歳、武  
田耕雲斎を敦賀に逐ふ。京師の戦に会津を退く。戊

辰正月、徳川慶喜を大阪に扼す。同年三月、官軍の先鋒と為り、江戸に進み、上野宮を池上本門寺に幽す。後薩の隊長と為り、会津を討て大功有り。事平に及び、官を経て陸軍少将と為り、熊本鎮台に在り。一年にして陸軍裁判長となり、後廟議意に適ず、西郷と共に退て本国に帰り、私学校の長となり、壮士を励し、今日兵を挙るに及て、策略人望、西郷の右に出と昔日天下に勲功ある豪傑。

#### (篠原記事)

国幹は、王政維新の際、徳川慶喜を大阪に扼し、兵を伏水に破り、進んで東京に入、上野宮を池上本門寺に幽閉し、有栖川宮に随て会津を討ち、大功を奏して東京に凱陣し、陸軍少将に任ぜられしが、庶堂官吏の征韓を非とする者を惡み、西郷と俱に官を辞して本国に帰り、明治十年二月、兵に将として官軍と戦ひ百戦、遂に吉次峠の役に討死を遂げしは、惜べき英雄なりしと云。

#### (前原記事)

一角は、前原一誠が二弟なり。長州萩の人。幼なる時、衆兎に優り、常に闘争を好む。驍勇にして、擊剣を能くす。同県士族佐瀬某が養子となり、明治九年十月、兄一誠が同志を募り、兵を長防の間に挙るや、朝廷早くもその機を察し、伏見親王を総督となして之を討しむ。一誠、計破れて遂に、石見の宇龍港に捕はれ刑に付き、余党悉く平ぐ。此時に當てや、一角は通れて薩摩に在り。再び兄が宿志を続んと、茲に一年、則ち西郷隆盛の馬首を東するに際し、一角、奮然蹴起三尺有余の豪刀を振り、自ら戦陣の前頭に進み、大喝一声呼はつて曰、「前原一誠が弟一角は我也」と。敵を斬殺する事、算なし。実に西南無比の猛勇と謂可し。

#### (阿香記事)

隆盛の妻、名を香と云ふ。鹿兒島県士族岩山某の女なり。隆盛に嫁して三男一女を生む。幕府の時、夫隆盛が流竄せらるゝに當り、随て大島に在り。磯打浪や松風の音のみ絶ぬ島影に、共に艱苦を俱にせしが、時なる哉、国に帰るを得、隆盛は旭の昇る勢にて、正三位参議陸軍大将に進みしかども、一朝の怒に朝廷を退き、十年二月、兵を九州に挙るや、香女は、同県士族の婦人中、夫兄と俱に斃れて地下の鬼となり恨みなしと決心せる烈婦五百余人を編成し、之れが長となり、隆盛が軍を補けて陣中にあると云ふ。香女本年三十九、外が婉にして、内猛、穎慧能く和歌を詠ず。また長刀の術に妙を得。稀世の英婦なり。

薩軍の主要人物を大首絵(上半身を画面いっぱい描く浮世絵の形式)で描く揃物錦絵。全体で何枚制作されたのか明らかに出来ないが、前原一角のような、想像上の人物も含めるかたちで、人物が選定されている。鈴木年基(生没年未詳)は大阪で活躍した浮世絵師。月岡芳年の門人で、師の洋画風の写実的な描法を学び、本シリーズも各人物の表情を、想像画ながらよく描きえている。また、年基は文才もあったと見え、大阪の錦絵新聞「新聞図絵」(明治八年創刊)や、草双紙『薩摩大戦記』初編(六編(明治十年三月)十月刊、参考図版10)、『薩摩大戦記起原』(明治十年十一月刊)などの編集出版も手がけている。西南戦争の叙述に努めていただけあって、本シリーズの背景に置かれた記事も行き届いている。薩軍の人物を個々にとりあげて列挙してゆく揃物錦絵としては、本シリーズと同じく大阪で制作された鈴木年基「有名十八史略」(参考図版12)、中井芳滝「明治十年」戦士銘々伝(参考図版13)なども知られ、相応に人気を博したものであろう。こうした揃物錦絵制作の流行は、

明治十二年頃から種々刊行された、篠田仙果編『明治英名百詠撰』(参考図版21)、沼尻絰一郎編『現今』英名百首(参考図版22)などの、いわゆる「英名伝集」を生み出す背景をつくり出すこととなる。(大庭)

9

#### 【日向国】三國峠進撃之図

大判錦絵六枚続

山崎年信画

明治十年八月十五日届

〈東京〉荒川藤兵衛

三國峠は、大分県の豊後大野市三重町と佐伯市宇目町の間にある。六月十七日、官軍はこの峠周辺に散在していた薩軍の砦に夜襲をかけ、激しい攻防戦が行われた。よって画題に言う「日向国」は「豊後国」の誤り。西南戦争錦絵は、大判三枚続のスタイルで描かれるのが一般であるが、本作は、江戸期の浮世絵にも時折見られる六枚続の特大画面に仕立てている点が目新しい。ただ両端の一枚目と六枚目に、それぞれ画題と落款があることから知られるよう、左右のどちらからでも三枚続の絵として鑑賞に堪えるような構図となっている。絵師の山崎年信(一八五七―一八八五)は、月岡芳年門人で、東京、のちに大阪などで活躍した浮世絵師。西南戦争錦絵を数多く手がけ、新聞の挿絵も描いた。投げ飛ばされる人物、暴走する馬などに見られる動きを誇張した表現、切り落とされた首や血にまみれた人物などの凄惨な場面の描写は、月岡芳年が得意としたところであり、師の画風をよく継承して描かれている。(大庭)

鹿兒嶋暴徒見立あふむ石  
読売新聞六百七十号

大判錦絵

守川周重画

明治十年四月二十七日刷

〔東京〕多賀甚五郎

久留米大学筑後文化資料室

（記事）

さて其つぎは、鹿兒嶋の  
 頑陋れんの肥後あばれ、  
 ふだんしなれしうれん  
 からまけも、しらずに  
 いるが、玉とりこむ度に  
 どつさりと、みんなに分て  
 つゝもたせ、ゆだんのならねへ  
 小息子も、とりのす坂にみの  
 やぶれ、わるいうきなも薩の武士、  
 桐野たうへも二と三ど、だんぐ  
 ふへる頭かづ、一ばんやまの戦にて、あらくれ男の  
 子を魁に、死まで誓てひるまねへ、連戦徒党の吉之助。

明治時代に普及した新たなメディア「新聞」と、江戸時代以来の「錦絵」が融合し、絵を主体として新聞記事を庶民に分かりやすく報道した、いわゆる「錦絵新聞」のひとつ。「読売新聞」六百七十号（明治十年四月十七日発刊）の「寄書」の欄に見える、「弁天小僧の辞譜」と題する投書（西郷隆盛、通称吉之助を、歌舞伎「青砥稿花紅彩画」、通称「白浪五人男」の一人弁天小僧に見立て、拳兵の由来を歌舞伎の台詞調で語らせた短文）を錦絵新聞に作ったものである。従って、パロディーの台詞は芝居文字で記され、西郷は「新政厚徳府」の文字

が書かれた傘をさして、見得を切る姿に描かれる。標題の「あふむ石」（鸚鵡石）は、歌舞伎役者の台詞回しを真似ることができるよう、名台詞を抜粋してまとめた冊子のこと。江戸後期に芝居小屋で盛んに売買されていた。絵師の守川周重（生没年未詳）は、役者絵の名手豊原国周の門人として知られる。（大庭）

11

西郷星桐野星

大判錦絵

山崎年信画

明治十年九月届（日付なし）

出版者未詳

（記事）

女郎

「浮川竹も親のため、ふし合なるはづのこの身は、泥まにありながら、花は清き金荃花、お金の沢山有御客を、あなた様の御光りで、御引合を守らせ給ひ。  
 役しや

「西郷さまがおはこの鉄砲、僕芝居を打たびごと、どんぐり当りはづさぬよふ、偏に利益をさづけ給ふ。  
 めかけ

「官ちやんのお妾もいゝが、合乗りや跡からお尻香をかゞれるに恐れ、どふぞあれを封込て下されまし。  
 かみゆひ

「戦地から戻られた、しらみだらけの伊賀よりやあ、元の大きいてうで、結たい様にねがい舛。人力

「がらく引ても、□□きしがらわからねへが、ら

くだ客のぼろのなきよふ、お守りなされて下さりまし。

娘

「髭はあつてもよふござい舛から、菊五郎と調本をつきませたよふな亭主をおさづけ成て下り舛。

隠居

「悴がきふして、私も古米一粒送られず、左り団扇もほぐうちには、西郷さまの御利益で、悴をどふぞ元の武士にしてくださいまし。

町人

「南無西郷星大仁義、偏に御利生をしまして、彼一条運の字を、おはらしなされてくださいませ。南無隆盛御星さまぐ。

書生

「生君のよふに高名にはならずとも、せめて貴君のをなら位、僕が名もかんばしく、万国までもにほわせたうござり舛。

かみさん

「女房かたぎでくらはしては、朝夕こまる今の世の中、すこし盛はすぎましたが、旦那とりがいたしとふござり舛。西郷さまの御利益で、金持旦那を御引合せ願ひ舛。女はさしてよくもないが、其かわり背負ふた子ども壱人、またおなかにもをりまする。ヲホ、、、、、、、。

百姓

「今年日照で、どふもこまり舛。西郷さまの御力で、雨を降せてくださりまし。

芸しや

「南無偏に、西郷さまの御利益をしまして、お金の沢山有御客さまをおさづけなされてくださいまし。然し髭は御免ぐ。

たいこ

「つらあつかはで、どんつく御客なくせに、金

をもつかわず、金と女にぴりく／＼して、髭はあれども、おしげのちり紙、一ぼんたりともおしんでださず、いやはや当世の客は全くことばは申成りません。

右上の詞に「明治十年八月上旬より、毎夜辰巳の空に紅光たり」とあるように、西南戦争のさなかの八月から九月にかけて、火星が地球に大接近して夜空に赤く大きく輝いた。人々は、そのひととき大きな星に西郷隆盛の姿を重ねて西郷星と呼び、また火星の近くに見えた土星を西郷の片腕である桐野利秋の姿と見、桐野星と呼んだという。この西郷星と桐野星は錦絵に好んで描かれたが、本作もそのひとつ。女郎、役者、権妻（めかけ）、髪結、娘、人力車夫、隠居、商人、書生、おかみさん、百姓、芸者、太鼓持など、あらゆる職業階層の人々が、西郷星と桐野星に手を合わせ、さまざまに願い事をする様子を描く。（大庭）

12

西郷隆盛夢物語——（各）大判錦絵二枚続  
上・中・下

笑門舎羽田富次郎画・記事

明治十年九月三日届

〈東京〉多賀甚五郎

西郷隆盛が夢の中で「世界万天の主宰」に接見し、西南戦争に至った経緯を上聞するというこの「西郷隆盛夢物語」は、大判二枚に挿絵を描き、その余白を文章で埋めた、読むことを主眼とした錦絵である。西郷の住まいの床下に忍び込んだ者を捕らえてみると、政府の命を受け、西郷を暗殺しに来たことを白状する。そこで、上京して事の始終を奏上しようと思ひ立ち、鹿兒島を出た西

郷は、熊本城下で官士にさえぎられたため、西南戦争に至ったのだと申し開きをする。しかし、「主宰」は、暗殺は「暗察」の聞き違いであることを西郷に指摘し、曲直の裁きをせんと、西郷に不審の廉を責問する場面で終わっている。この物語は好評を得たのか、本作版行の翌月には、大阪の版元である伏見豊吉が冊子に仕立て直して、草双紙体裁の『西郷隆盛』夢物語』を刊行している。表記の細かな異同は見られるものの、本作とまったく同一の内容である。さらに、その翌月には、同じく大阪の版元である池田伝兵衛が、もう一度、錦絵に仕立て直して売りに出してもいる。ただし、この池田版「西郷隆盛夢物語」は本作と比べると、絵も刷りも粗雑なものに過ぎない。なお、本作の続編である「西郷隆盛夢物語二号」（参考図版14）も制作されている。本図に「編輯画工」と記された羽田富次郎は、『真書』西郷隆盛一代記』など、西南戦争の実録編者としても名が見える。また、笑門舎福来を称して、『開化』東京藤栗毛』などの戯作や『明治年間東日記』などの実録物も手がけている。（生住）

13

【鹿兒島鎮定】首実檢之図——大判錦絵三枚続

月岡芳年画

明治十年十一月五日届

〈東京〉林吉蔵

久留米大学筑後文化資料室

（詞書）  
明治十年九月廿四日、東伏見少将の手、一中隊攻撃して城山に登る。賊大敗して砲声止ぬ。西郷、桐野、其他緒将の最期の一戦は官軍に手負少し。西郷を

討留しは、陸軍中尉兼二等大警部安村治孝君にて、自分も傷を受けて首を取ることあたはず。其内、西郷の股脇の兵駈来り、首を切て逃げ去たり。其他、賊兵或は帰順し、又は捕縛す。於此、悉く亡ぶ。二月以来の戦端、本日平定す。西郷の首級を採出し、有栖川の宮は、諸将と共に賊将の首級点検あらせられ、夫より戦地巡廻も済、廿七日に鹿兒島を引払ひ、廿八日御発にて、長崎へ御着、一日御逗留、廿日長崎御発有し由。

「首実檢」は、討ち取った首が本物かどうかを確かめること。中世の軍記物語やそれに取材した浄瑠璃、歌舞伎などによく出てくる場面である。城山に立て籠った薩軍を平定したのち、西郷隆盛をはじめ、桐野利秋、村田新八、池上四郎らの討ち取った首を、本営において征討総督の有栖川宮らが実檢する場面を描く。しかし諸記録によれば、実際には桐野以下三名は斬首されておらず、西郷は別府晋介の介錯で自刃し、その首を近臣が土中に隠しておいたのを、官軍が探し出して検視したと言う。（大庭）

14・15

日隅近傍戦図——大判錦絵三枚続

鈴木年基画・詞書

明治十年八月十五日届・同年九月刊

〈大阪〉鈴木雷之助（年基）

西郷隆盛討死之図——大判錦絵三枚続

明治十年八月十五日届・同年九月刊  
〔大阪〕鈴木雷之助(年基)

〔日隅近傍戦闘詞書〕

薩賊諸隊、兵気  
衰へ、窮迫の余地  
なき時機に到るに、  
賊將西郷隆盛は、  
部下の多隊へ、書を  
回達なし、最期の  
血戦を期せしと、  
方今の投報に評  
せり。其戦の開く乎、  
現に夾撃なるを想  
像なし、平定の凱  
歌を慶望なす  
とや謂ん

〔西郷隆盛討死之図詞書〕

嗚呼、猛雄なる旧陸  
軍大将西郷隆盛は、  
一身数千万の大軍  
に当り、百戦百勝、英  
名を万国に轟せしが、  
十年の大功も憐む  
べし、一朝弾烟の中に  
消滅せしは、天なる  
かな、命なる哉。

「日隅」とは、現宮崎県にあたる日向国と現鹿児島県  
東部にあたる大隅国のこと。これら二作品を較べていた  
だきたい。14「日隅近傍戦闘」が、画題と詞書を改めた

だけで、15「西郷隆盛討死之図」として売りに出されて  
いる。「西南戦争錦絵」の版行は、スピードが勝負であつ  
たことを窺わせる好例である。同様の事例は錦絵版『東  
京日々新聞』にも見出され、明治九年十二月届の伊藤静  
斎「思案橋の暴徒事件」(〔東京〕福田熊次郎版)が、そ  
のまま記事の部分だけを「鹿児島暴徒等熊本県安政橋夜  
討図」に変えて版行されたりもしている。(生住)

16・17

延岡陣営図・延岡山中之図

大判錦絵

大山鞠問の図・米蔵ヨリ城山を攻

梅堂国政画

明治十年十一月二十一日届

〔東京〕辻岡文助

鹿児島戦争記

大判錦絵三枚続

進齋年光画

明治十年十二月二十八日届

〔東京〕児玉弥七

西南戦争の重要場面の数々をまとめた、ダイジェスト  
版の錦絵。17進齋年光「鹿児島戦争記」は、西南戦争の  
始まりから熊本での戦いまでを、以下のような構成で三  
枚続に描く。

一枚目

・熊本城戦争(賊軍熊本城に攻寄しを、官兵散弾を乱  
発すること雨の如し)

・賊徒軍艦入船に迫(賊軍高尾丸を乗取らんと小船を  
以て襲撃なす)

二枚目

・鹿児島英勇揃

(鹿児島暴徒の第一隊の大將篠原国幹、第二大將西郷隆  
盛、副將村田新八、第三大將池上四郎、第四大將桐野  
利秋、第五大將長山某、淵部高照、島津某、後陣に扣  
へ、西郷小平、永山矢一郎、別府新助、同九郎、逸見  
十郎太、中島武彦、肥後助右エ門、児玉八之進、伊東  
直次、山口小右エ門、平山新助等、諸軍の隊長也)  
・櫻嶋生徒弾薬を拒(鹿児島暴徒、陸海軍の弾薬を掠奪  
し、官船を奪とす)

・吉治越戦争(篠原国幹、手疵を負て本営に退く)  
三枚目

・西郷隆盛本営(賊の諸將、熊本城を襲はんと軍事を  
なす)

・賊兵堅台場守(官軍、三の台場を抜んと大ひに進撃  
なす)

・安政橋に賊徒敗軍(賊軍、安政橋渡り、城兵と苦戦  
なして遂に散乱す)

進齋年光(生没年未詳)は、月岡芳年の門人で、西南戦  
争をはじめ日清、日露戦争などの報道画を多くてがけた  
東京の浮世絵師。先に、年光は大判錦絵三枚続の「鹿児  
島英雄揃」(明治十年九月十二日届、大倉孫兵衛版)を  
発表しており、本作二枚目の「鹿児島英勇揃」は、それ  
を簡略化して描いている。16梅堂国政「延岡陣営図・延  
岡山中之図・大山鞠問の図・米蔵ヨリ城山を攻」も、あ  
るいは三枚続の錦絵の一部分か。(生住)

18・19

鹿児島凱陣双六

錦絵 六〇・一cm × 七三・〇cm

月岡芳年画

明治十年十二月十七日届

〔東京〕大倉孫兵衛

鹿児島平定寿語録——錦絵 七四・〇cm×七一・七cm

月岡芳年画

明治十年十二月七日届

〈東京〉津田源七

いづれも月岡芳年が描いた錦絵双六である。大判五枚を貼り合わせた大きさで、西南戦争勃発から終結までの経緯がこれで辿れるようになっていいる。画題に「平定」あるいは「凱陣」とあるように、やはり官軍勝利を言祝ぐ意図がこめられている。ちなみに、絵双六は江戸時代に始まり、以後は正月遊びの定番として庶民の間で定着した。絵双六には、廻り双六と飛び双六の二種があり、廻り双六は順に進んで上がりを目指す、飛び双六には各コマに三つ程のさいころの目が記してあり、出た目に従って指定のコマへと縦横に飛び、それを繰り返しながら上がりを目指す。この二作品は飛び双六で、「鹿児島平定寿語録」は「二↓三↓四」と出せば最短三回で「上り」にたどり着き、「鹿児島凱陣双六」は「一↓四↓五↓一」と出せば最短四回で「上り」にたどり着いてしまう。それぞれのコマの割り付けは次のとおり。

（鹿児島平定寿語録）

ふり出し 鹿児島拳兵―官軍繰出―県庁乱入―花岡山―熊川戦闘―母子哀別―壮士自刎―大山捕縛―籠城慰労―安政橋激戦―西郷諭言―旗取復―凱陣―緑川進軍―城山陥―良人遺物―降伏―首実検―隊将陣没―上り

（鹿児島凱陣双六）

西海起源操出―磯町の弾薬庫に暴徒の手始―熊本鎮台に五十余日籠城―薩摩の大島に菊之助の怪力―鹿児島湾に両士の説論―川尻の本営に隆盛の号令―私学校内に小平の軍略―花岡山の眺望に地雷火の奇計―田原

坂の乱戦に強将の指令―高橋の戦闘に聯旗の功勞―植木の激戦に三勇の誉れ―甲突川の竹柵を破る女丈夫の働き―人吉の小橋に丸山の奮激―吉治越の激戦に謀士の陣没―長崎県の裁判所に老賊の伏罪―日向の松下に勇士乃落泪―岩崎谷乱軍にピストルの分捕―城山の一戦に官軍の凱歌―官軍の本営に老首の実検―上り

西南戦争の絵双六としては、これら二作品のほかに、徳島文理大学蔵「鹿児島鎮静双六」（楊洲周延画、〈東京〉浅野栄版、明治十年十二月届）や、東京学芸大学付属図書館蔵「西南戦地順図」（〈大阪〉広田米七版、明治十年十一月二十八日届、同十二月出版）を確認している。（生住）

20・21

西南勇士集

扇面銅版画 天地一四・六cm、上弦四七・六cm、

下弦二一・〇cm

画者未詳

（明治十年頃）刊

出版者未詳

久留米大学筑後文化資料室

熊本近傍戦争之図

扇面銅版画 天地一四・一cm、上弦四五・二cm、

下弦一八・三cm

画者未詳

（明治十年頃）刊

〈京都〉山口市太郎

西南戦争の好画題を一つの画面に集めた扇地紙（扇

子に仕立てるための紙）と、実際に扇子に仕立てたもの。共に出版年は不明だが、おそらくは明治十年の半ば以降に、既刊の各種錦絵の一部を簡略化して描いたものである。西南戦争錦絵で取りあげるモチーフが定着し、それをもとにバラエティーにとむ作品が制作されていた様子がかがわれる。銅版印刷は幕末期から書物に適用され、細かい文字や描線の刷り出しが容易なことから、実用、通俗あるいは趣味的な小型本（中本・小本・豆本）に、緻密な挿絵をふんだんに加えることを可能にした。本図が制作された明治十年前後は、銅版刷り小型本の出版が盛んに行われた時期であった。各扇面に見える場面は次のとおり。

（西南勇士集）

- 征韓会議之図
- 暴士等弾薬ヲ奪ヒ西郷ヲ推シテ將トナシテ兵ヲ起サントスルノ図
- 西郷隆盛等將トナリテ熊本県ニ攻寄ントスルノ図
- 木ノ葉口ノ戦ニ賊將村田新八烈戦シテ大ニ傷クノ図
- 三月三日夜大に田原坂ニ賊軍大敗ノ図
- 高瀬ノ戦ニ西郷小平村田三介討死ノ図
- 安政橋ニテ吉松少佐五百余人ヲ率ヒテ賊ト戦フノ図
- 注進ニヨリテ川尻本陣大騒ノ図
- （前原一角は）前原一誠ノ弟ナリ山鹿ノ戦ヒニ大ニ勇戦シテ官軍ヲ破ルノ図
- 野津君奮戦大隊旗ヲ取返スノ図
- 西郷妻將トナリテ婦女ヲ募リ兵トナシ官軍ト戦フノ図

（熊本近傍戦争之図）

- 鹿児島之暴士肥後熊本出奔之図
- 熊本城外地雷火乱発之図
- 植木大戦官軍勝利之図
- 田原坂官軍進撃賊敗走ス

・南ノ関総督宮有栖川公御本営ノ図 (大庭)

22・23

〔西南雲晴朝東風役者絵〕 大判錦絵三枚続

豊原国周画

明治十一年二月二十六日届

〈東京〉長谷川其吉

〔西南雲晴朝東風役者絵〕 大判錦絵三枚続

楊洲周延画

明治十一年届(月日付なし)

〈東京〉山村金三郎

明治期の浮世絵界で、役者絵の名手として知られた豊原国周(一八三五―一九〇〇)と、その弟子楊洲周延が、西南戦争に取材した歌舞伎「西南雲晴朝東風」(河竹黙阿弥作、明治十一年二月、東京新富座にて興行)の舞台を絵にしたもの。興行は八十日余り続いて大当たりをとったといい、人々の関心がいかに西南戦争に向けられていたかが知られる。

両作品に描かれるのは、九世市川團十郎の西条高盛(西郷隆盛)、初世市川左団次の岸野年明(桐野利秋)、五世尾上菊五郎の簗原国元(篠原国幹)、市川子団次の摂府辛助(別府晋助)、中村宗十郎の武ノ上四郎(池上四郎)、岩井半四郎の岸野の妾お秋など。それぞれ実名から微妙にはずれた命名であるのは、歌舞伎において実在の人物を扱うときには、時局に触れぬように、それと連想できるようにな名前を付けるのを通例とするためである。

(大庭)

24・25

西郷腹中之図 竪大々判錦絵

画者未詳

(明治後期)刊

出版者未詳

久留米大学筑後文化資料室

西郷隆盛妻腹中之図 竪大々判錦絵

画者未詳

(明治後期)刊

出版者未詳

久留米大学筑後文化資料室

いわゆる「仙胎図」(中国の道教で行われた、体内の宇宙観を图示する一種の解剖図)のパロディー。24「西郷腹中之図」は、前をはだけて座る西郷隆盛の体内を、肺、肝、心(藏)、腎臓、大腸、胆、小腸、胃、膀胱、両道便門の各部位ごとに図解するというかたちで、西南戦争で自刃するまでの生涯をおもしろく説明したもの。冒頭(右上部)に「序に曰く、西郷吉之助は、正三位陸軍大將まで昇進し、<sup>(衆議)</sup>しうぎさまぐと身のなり行のさまを、人<sup>(体)</sup>たいふくちうぞふふに見たて、ながく<sup>(年月)</sup>のとしつきすごせしを、今此一紙のうへにあらわせしかど、ほんのたわむれのみをしるす」とある。25「西郷隆盛妻腹中之図」は、臓器ごとの図解はせず、背景に生涯を略述し、腹部に「以前の心中」「門出の諫言」「忠臣変心」「女隊の出陣」「戦地の働」「恩怨の動」「前非後悔」「墓碑参詣」などのエピソードを描く。両作ともに、善玉と悪玉(人の善心、悪心を擬人化したもの)が、左右から数本の糸で体の各所を引き合っており、心の葛藤する様子を表している。こうした、「仙胎図」をパロディー化した浮世絵の先行例としては、ともに幕末頃の刊行で竪大々判錦絵の、歌

川国貞「房事養生鑑」(前をはだけた花魁の腹中を図解して、交合の仕組みと心得を説いたもの)、歌川芳綱「飲食養生鑑」(上半身裸で酒を飲んでる男の腹中を図解して、消化の仕組みを説いたもの)などが知られる。

(大庭)



(参考図) 1・2

鹿児島追討記 — 半紙本一冊

西野古海編

明治十年二月二十二日届・二月刊

〈東京〉 木村文三郎

鹿児島戦争記 — 半紙本一冊

樋口徳造編

明治十年三月刊

〈東京〉 又新舎

西南戦争の経緯をいちはやく系統立てて叙述した、いわば報道読み物で、いずれも数丁(一丁は現在の書籍の二頁に相当)にしか満たない小冊子である。文章のみでもちろん挿絵などもない。事件に新たな動きがあるにつれ、次々に号を重ねてゆくという、速報性を重視した出版方法をとる。『鹿児島追討記』の末尾に引用書目として、「朝野新聞」「仮名書新聞」「東京日々新聞」「絵入新聞」「郵便報知新聞」「読売新聞」「曙新聞」「大坂新聞」をあげているところからも知られるよう、この種の読み物の叙述は、新聞各紙の記事を取捨選択しながら再構成したものであった。(大庭)

(参考図) 4

西南征討全記 — 大判錦絵三枚統

進齋年光画

(明治十年) 刊

〈東京〉 山中北郎

久留米大学筑後文化資料室

(詞書)

爰に明治十年一月末つかたより、鹿児島県下に反賊のおこりし始めは、該地に設置する陸海軍の弾薬を毎夜あまた奪ひ、夫より軍に名のなきも、帰省の巡查を捕縛なし、無根の事を強迫し口実として、へいを募り、兵器を携へ、西郷はじめ桐野、篠原などの人数若干引率なし、熊本県下へ炮入せしかば、天皇よりして征討の令下り、有栖川二品親王を総督として、参軍にわ山県、黒田、川村等、錦の旗を朝風にひるがへし、陸海軍の官兵に司令をなして操出したり。また熊本の堅城には、谷少将をはじめとして、数多の官軍奮勇にて、しばく賊兵をなやましたり。

熊本城における攻防戦を描いたもの。出版届出の月日がないが、「西南征討全記」(西南戦争の全容を記録したという意味)と題しながら、詞書が鹿児島私学校の弾薬掠奪事件(二月二十九日)から、薩軍征討の詔勅(二月十九日)、熊本城での攻防戦(二月二十二日)まで略述して終わっていること、また「西郷小平の妹」「伊集院の伯母」など、女性が参戦していることなどから見ても、四月頃に制作されたものか。いまひとつ構図にまともりがなく、彫刻も粗い箇所が散見される。特に詞書の文字は彫り違えが目立っており、急ごしらえで制作されたこ

とを思わせている。(大庭)

(参考図) 7

【薩州】鹿児島大進撃之図 — 大判錦絵三枚統

山崎年信画

明治十年九月十八日届

〈東京〉 上村清左衛門

久留米大学筑後文化資料室

(詞書)

時に明治十年九月の末に、至て、未だ西海、穩かならず。逆浪天にみなぎる其原因、一朝一夕に非ず。就中、西郷隆盛、桐野利秋、村田新八等、屢々暴徒を募、官軍をさへぎり、城郭を襲撃して、専ら新政厚德を称といへども、豈久しからずや。

戦争も終盤にさしかかり、薩軍敗北の色が濃厚となっていた頃の錦絵。詞書に言う、薩軍が「屢々暴徒を募、官軍をさへぎり、城郭を襲撃」する様子を絵にしたままで、具体的にいつの戦況かは示されていないが、おそらく、西南戦争はじめての実戦となった、二月二十二日の薩軍による熊本城包圍襲撃を意識して描いたものである。(大庭)

(参考図) 11

薩日略軍記 — 大判錦絵三枚統

うきよ年光画・内田正鳳詞書

明治十年九月一日届

〈大阪〉鈴木利兵衛

久留米大学筑後文化資料室

（詞書）

却説とく、暴徒の総將西郷隆盛、肥後の国川尻の本営を引払ひ、人吉に徒を残り、日向延岡の地に仮営を結び、之を根と為し、諸口に手配りの指揮をもつぱらとなす。尚同国都の城はむなしく落入り、弥以て此城に党集め、必死の軍略令し合、暴將には桐野、村田、貴嶋、辺見等、攻撃を防がんと構へたり。官軍には高島少将、旅団を備へ、数千の兵を引率し、整々堂々と攻激せられたり。海岸より谷干城進撃すとぞ云々。

内田正鳳記

都城の陥落後、薩軍が延岡に本営をうつして官軍と戦う様子を描いたもの。ただ内田正鳳が記すような、薩軍が延岡城を占拠して官軍と戦ったという史実はないものの、絵は詞書にそって、噴煙の間からのぞく天守閣、幔幕をはった城の一部屋から戦いを遠望する西郷隆盛の姿などを再現する。そびえ立つ石垣がやや誇張して描かれるのは、現在でも延岡城跡に残る、高さ二十二メートルにもおよぶ、俗に「千人殺しの石垣」と呼ばれる石垣を意識したのであろうか。内田正鳳について知るところは少ないが、あるいは大阪の錦絵新聞の記者か。『西国三十三所霊場』（明治十二年刊）の著があるほか、二代長谷川貞信と組んだ揃物錦絵「西国三十三所霊所記」（関西大学図書館蔵）の作例がある。（大庭）

（参考図） 15

薩賊暴戦一覽

大判錦絵三枚続

長谷川貞信画

明治十年七月二十五日届

〈大阪〉砂越新八

西南戦争勃発のきっかけとなった明治十年二月の弾薬掠奪事件から、同年四月の熊本方面での戦いまでを全十五図にまとめて、大判三枚続で一挙に見せようとした、西南戦争前半のダイジェスト版錦絵。各図の見出しは次のとおり。

- 第壹号 薩賊、官軍の弾薬を奪ふ
- 第二号 賊軍、雪中に徒党を集めて熊本へ出陣す
- 第三号 田原坂に官兵、賊徒と大戦争
- 第四号 安政橋に両軍大進撃
- 第五号 地雷火の奇計、賊軍大敗走
- 第六号 賊徒、熊本城に迫る
- 第七号 西郷、川尻陣中の景況
- 第八号 前原一格、勇猛を顕す
- 第九号 篠原国幹討死乃躰
- 第十号 柳原君、鹿児島に勅使の図
- 第十一号 野津少将の勇氣、聯隊旗を取戻す
- 第十二号 女徒隊を固めて官兵に向ふ
- 第十三号 谷少将、熊本堅固に籠城の躰
- 第十四号 童子隊を組で西郷の陣に出兵す
- 第十五号 西郷、花岡山より軍中を遠望する図

第四号は、長谷川貞信「熊本安政橋戦争之図」（〈大阪〉砂越新八、出版届日不明）に似て、第十三号は、本作版行の翌月に、長谷川貞信「谷干城君熊本城ニ防戦之図」（〈大阪〉矢氏安兵衛版、明治十年八月十七日届）として、

大判三枚続に仕立て直されている。しかし、その一方では、第十一号は、月岡芳年「鹿児島征討記之内【高瀬河通ノ戦争野津公聯隊旗を取返ス図】」（〈東京〉熊谷庄七、明治十年三月十三日届）に、また第十五号は、月岡芳年「鹿児島新誌内【西郷花岡山巡見】」（〈東京〉植木林之助版、明治十年四月届）に、第十四号は、山崎年信「鹿児島記聞【川尻本営図】」（〈東京〉福田熊次郎版、明治十年四月十九日届）の、大判三枚続の絵柄とほとんど同様である。さらに、第七号は、画者不詳「鹿児島県有のそのまゝ 五号」（〈大阪〉金井徳兵衛版、明治十年三月五日届・同月出版）という大阪の錦絵新聞の構図と酷似し、第八号もまた、同錦絵新聞の六号からの引用関係をうかがわせる描写となっている。このようにして他の絵師が描いた錦絵を、躊躇なく写しながら本作は描かれており、現代の我々の目から見れば、著作権の問題などが気になるところではあるが、当時はこのようなことは珍しくはなかつたようである。ただ、本作においては、元絵を写して描くときは、その構図を反転させたりなどして、一応の差異化を図っている。（生住）

（参考図） 17

西南鎮定賞賜図

大判錦絵三枚続

一英齋歌川芳艶画・永島虎重詞書

明治十年十月二十六日届

〈東京〉木村定五郎

（詞書）

邪は正に勝ず、直言なるかな。旧陸軍の大将たる西郷隆盛は、武文を以つて高名を顕はし、勤王無二の士官たりしが、昨日に変わる

賊將の汚名を受け、永く日隅肥の地方に暴威を振ひしが、陸海の將校方、陸統として出張し、勉勵尽力して、遂に鎮定の大功を奏し、追々帰京せられて、各官の諸公へ賞碑を賜るいふ。

永島虎重記

明治十年九月二十四日の城山総攻撃で、西郷隆盛は自刃し、西南戦争は終結を向かえる。その後、政府軍は順次凱旋し、十月四日・十日・十一日・十六日、諸將が帰京参内した。本作はその想像図である。同種の錦絵は多数確認されるが、楊洲周延「西国鎮撫諸將賜天盃之図」(東京)辻岡文助版)には「明治十年七月廿五日御届」と記されており、西南戦争終結の二か月も前から、凱旋参内の画が企画されていたことが知れる。二代目歌川芳艷(箕輪平吉)は、初代歌川芳艷の門人。一英齋とも号した。芳艷による西南戦争錦絵は他に知るところがなく、珍しいと思われる。(生住)

(参考図) 18

大新ばん鹿兒嶋暴徒人名集

大短冊版錦絵

よし光画

(明治十年頃)刊

(大阪) 田中安

18「鹿兒嶋凱陣双六」、19「鹿兒嶋平定寿語録」と同じく、西南戦争に取材した子供向けの玩具絵。そのうちでも、本作はあるテーマのもとに事物を列挙して見せ、物の名を覚えさせるという教育的な意味合いをもつ「物尽くし」

物のスタイルで、薩軍八十人を集める。8「文武高名伝」、「有名十八史略」(参考図版12)、「明治十年」戦士銘々伝(参考図版13)のような、薩軍の勇士を個々にとりあげる揃物錦絵の方向性と、玩具絵の物尽し物のスタイルが融合したものと見えよう。一段目右端の西郷隆盛にはじまって横に、桐野利秋、篠原国幹、村田新八、池上四郎、淵辺高照と続いてゆき、五段目には、篠原国幹の妻と娘、桐野利秋の妻、西郷隆盛の妻と娘など、女隊までをも含めていいる。西南戦争報道の影響は、こうした片々たる子供玩具にまでおよんでいたのであった。(大庭)

(参考図) 20

西南雲晴朝東風

大判錦絵三枚続

百姓作蔵住家の場

豊原国周画

明治十一年三月届(日付なし)

(東京) 福田熊次郎

鹿兒島県立図書館

(記事)

西条高盛 市川団十郎

今御身らが、今日をふけいきなりとかこつのも、いはゆる国のおとろへにて、時世につれてのことなれば、たれ(罪)の(科)ともいふにもあらず。方今三府五港をはじめ、都下は不学のものなきゆへ、かく開化の域にすゝめど、遠境僻地にいたりては、有学のものまれなるゆへ、いまだぶんめいの(時)にいたらず。されば、こん日大政府のあつき朝旨をわきまへねば、不平をならすものおほく、そのおよばざるをしらずして、やゝすれば、ととふをむすび煽動なすものあるゆへに、天下おだやかならざれば、こゝに全国のふけいきを生るなり。おひく遠境僻

地迄も学校あらざる所なく、教諭おろそかならざれば、少年輩は云に及ばず、其親たる頑固の者も終に学事の徳をしり、文明開化に進歩なさば、凡三千五百万の人民兄弟の心を生じ、全国一和なす時は、とゞうを結ぶ者もなく、全く天下泰平にて、鼓腹の時に至るべし。夫連も遠からねば、いまのこんくを打つがひ、昔がたりにしたがよい。

百姓作蔵 市川左団次

かうお見受申た所が、戦争などにおかゝり合なく、あなたは楽な御身分のお方のやうにぞんじられ。あなたも、事などは御存じはあり舛まいが、先百姓といふ者は、米はもとより穀物野菜作つて売るので、今日の活計を立て参り舛が、四五年此かた、ふけいきに物の売れのわるい所へ、此春から(肥後)の戦争、長いことも有まいと、思ひの外に四月ごし、立てもいまだにかた付ず、ばつたり物がうれなくなり、私計りじや有りませぬ、此近郷近在の(分限)はしらず、小前のものは、ひどいんぎをいたし舛る。

○その西條様といふは、御一新のはじめから、人にすぐれて天朝へ力を尽くしたお方ゆへ、くんこうによつて、大将の位にまでのぼりしが、何か心にかなはぬことでもあつてのことかぞんじませぬが、辞職なされて国へかへり、私学校を取立て、多くのせいとへけうゆなし、ひまさへあれば、田はたへ出て農業なすをたのしみに、その身におごりはすしもなく、こまる者にほどこして、どんなりつはなおかたでも、又は水呑百姓でも、おなじやうになさるゆへ、せかいにあんなおかたはないと、薩日隅の三ヶ国では神の仏のやうに思つて、わづか三才の子供でも、西條様といふ名をしたふ。この人望は金銀ではできぬこと、うけたまはれば学問も、すぐ

れたお方でありながら、何ゆへこんなくはだてをな  
されましたことなるか、ぐまいの生れの私共には、  
一円(金)がてんが参り舛ぬ。」

22〔西南雲晴朝東風役者絵〕と同じく豊原国周による、  
明治十一年二月、東京新富座で興行の、河竹黙阿弥作の  
歌舞伎「西南雲晴朝東風」の舞台絵。九世市川團十郎が  
扮する西条高盛（西郷隆盛）が犬を連れて、初世市川左  
團次が扮する百姓作蔵（劇中、左團次は岸野年明（桐  
野利秋）も二役で演じる）の家に立ち寄る場面を、二人  
の台詞とともに描く。作蔵は、訪ねてきた男が西条とは  
知らずに、西条が画策した戦争が長引いているために、  
下々の生活がいかに圧迫されているかを説いて聞かせ  
る。  
（大庭）



# 西南戦争関連年表

(毛利敏彦「西南戦争」(『国史大辞典 第八巻』、吉川弘文館、昭和六十二年十月)を元に作成した)

明治6年	10月23日	征韓論に破れた陸軍大将西郷隆盛ら、辞表を提出(明治六年の政変)。ただし、西郷の陸軍大将辞職は認められず、官位も元のままとなった。
	10月28日	西郷隆盛、桐野利秋らとともに鹿児島へ発つ。薩摩出身の武官、帰国する者およそ三百人に達した。
明治7年	2月1日	佐賀で「佐賀の乱」起こる。
6月		西郷隆盛の発意と指導で私学校を設立。
明治9年	10月24日	熊本で「神風連の乱」起こる。
	10月27日	福岡で「秋月の乱」起こる。
	10月28日	山口で「萩の乱」起こる。
	10月29日	東京で「思案橋事件」(土族反乱未遂事件)起こる。
明治10年	1月下旬	政府は、鹿児島市中心部にあった草牟田陸軍火薬庫の弾薬が私学校党の手に渡るのをおそれ、密かに運搬を図る(赤龍丸事件)。
	1月29日	この夜から、私学校党らによる弾薬掠奪事件が続発。
	2月3日	政府密偵の中原尚雄らが捕縛され、苛酷な拷問・取調の末、西郷隆盛暗殺密謀説が浮上。
	2月12日	私学校より鹿児島県庁へ上京の届け出。
	2月14日	一番・二番大隊進軍開始。
	2月17日	西郷隆盛、鹿児島を出発。
	2月19日	征討の詔が下される。征討総督に有栖川宮熾人親王。失火により熊本城天守閣焼失。
	2月20日	征討総督本営を大阪に設置、のちに本営は福岡・熊本・宮崎・鹿児島へと進められた。

2月22日	西郷軍、熊本県川尻（熊本市南部）に集結、熊本城への攻撃を開始。鎮台司令長官谷干城以下の守兵の懸命な防御により、やがて西郷軍は包囲作戦へと変更。この日、乃木希典率いる小倉十四聯隊が、西郷軍村田三介隊と植木（熊本県北部）で抗戦し、同聯隊旗を奪われる。
2月25日	西郷隆盛・桐野利秋・篠原国幹の官位を剥奪。
3月8日	島津久光慰撫の名目で、勅使柳原前光が軍艦と護衛兵を伴って鹿児島に入る。10日中原尚雄救出、12日鹿児島県令大山綱良を東京へ護送。
3月4日	田原坂（熊本県北部）の戦い（同月20日まで）。一番大隊長篠原国幹戦死。
3月19日	政府軍別働第二旅団が長崎より八代に上陸、のち熊本城攻囲中の西郷軍の背後を衝く。
3月20日	政府軍による田原坂総攻撃。西郷軍は田原坂を放棄。
3月21日	新鹿児島県令に岩村道俊が任命される。
4月15日	西郷軍、熊本城の包囲を解く。
4月26日	政府軍、鹿児島を占拠。西郷軍は本拠地を失うかたちとなる。
4月28日	熊本の本拠地に敗れた西郷軍は、再起をはかって人吉（熊本県最南部）を占領。
5月26日	内閣顧問、木戸孝允没。
6月1日	政府軍が人吉に突入し、陥落。西郷軍は、宮崎方面に転じる。
7月24日	政府軍が都城（宮崎県南西端）を攻略し、日向方面の西郷軍と対峙。西郷軍は、31日には宮崎と佐土原（宮崎県中南部）、8月14日には延岡（宮崎県北部）を失う。
8月15日	西郷軍、総力を挙げて逆襲を試みるも失敗。山間の長井村（現宮崎県延岡市）に追い詰められる。
8月17日	西郷隆盛は全軍の解散を表明、さらに重要書類を焼却して、従う者わずか数百人で暗夜の可愛岳（長井村後方）突破を敢行。政府軍は、西郷一行の行方を見失う。
9月1日	西郷軍が鹿児島に突入し、一時城下の大部分を西郷軍の支配下に置く。
9月8日	征討参軍山県有朋が鹿児島に到着し、城山に拠る西郷軍の包囲防守を第一とし、包囲陣地の完成まで攻撃を控える。
9月24日	午前4時、政府軍による城山総攻撃開始。西郷隆盛自刃。午前7時、終結。
9月27日	征討総督有栖川宮、鹿児島に入り、旅団の編成解除を命じる。
9月30日	鹿児島県令大山綱良、斬首に処せられる。

# 参考文献一覧

## 〈事典〉

- 原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典』全十一巻（大修館書店、昭和五十六年―昭和五十七年）  
吉田映二編『浮世絵辞典 底本』全三巻（画文堂、平成六年九月第三版）  
国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』（東京堂出版、平成二十年六月）

## 〈新聞復刻版〉

- 『朝野新聞 復刻版』（ペリかん社、昭和五十六年―昭和五十九年）  
『復刻版 郵便報知新聞 第一期』（柏書房、昭和六十四年―平成五年）  
『東京日日新聞 復刻版』（日本図書センター、平成五年―平成七年）  
『東京曙新聞 復刻版』（柏書房、平成十六年―平成二十一年）

## 〈図録〉

- 丹波恒夫編『錦絵にみる明治天皇と明治時代』（朝日新聞社、昭和四十一年四月）  
小西四郎編『錦絵幕末明治の歴史8 西南戦争』（講談社、昭和五十二年八月）  
尾崎秀樹他編『錦絵日本の歴史4 西郷隆盛と明治時代』（日本放送出版協会、昭和五十七年四月）  
熊本市教育委員会監修『錦絵・西南戦争』（熊本市観光協会、昭和六十三年一月）  
塩谷七重郎編『錦絵でみる西南戦争 西南戦争と福島県人』（歴史春秋社、平成三年一月）  
千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞 東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』（国書刊行会、平成二十年一月）

## 〈目録〉

- 村野守治編『西南戦争錦絵目録』（敬天愛人 2号）、西郷南洲顕彰会、昭和五十九年九月）  
富田紘一編『熊本博物館蔵西南戦争錦絵について』（熊本博物館報 No.7）、熊本市立熊本博物館、平成七年十一月）  
跡見学園女子大学短期大学部図書館編『跡見学園女子大学短期大学部図書館所蔵 異種百人一首関係資料目録 一』（跡見学園女子大学短期大学部図書館、平成十一年三月）

## 〈図書〉

- 井上清『西郷隆盛 上・下』（中公新書、昭和四十五年八月）  
高橋克彦『新聞錦絵の世界』（角川文庫、平成四年七月）  
土屋礼子『大阪の錦絵新聞』（三才社、平成七年十二月）  
須田千里・松本常彦校注『新日本古典文学大系明治編13 明治実録集』（岩波書店、平成十九年三月）  
佐々木亨『明治戯作の研究―草双紙を中心として―』（早稲田大学出版部、平成二十一年十月）  
高津孝編『明治の浮世絵師と西南戦争』（鹿児島大学附属図書館、平成二十三年十一月）

## 〈論文・解説〉

- 谷川恵一『現今 英名百首 解説』（リプリント日本近代文学30『現今 英名百首』、国文学研究資料館、二〇〇五年九月）  
土屋礼子『明治初期のニュース冊子にみる絵と報道』（ことばと社会 4号）、平成十二年十一月）

# 作品目録

## 戦争の始まり

No.	作品名	作者・著者	員数	届出・版行年	出版者	所蔵	掲載頁
-----	-----	-------	----	--------	-----	----	-----

1	【新聞】鹿兒島事情	小林清親画	大判錦絵三枚続	明治十年二月十九日届	〈東京〉武川清吉	個人蔵	19
---	-----------	-------	---------	------------	----------	-----	----

2	【鹿兒嶋新聞】熊本城戦争図	安達銀光画・大田錦詞書	大判錦絵三枚続	明治十年三月届	〈東京〉福田熊次郎	久留米大学筑後文化資料室蔵	20   21
---	---------------	-------------	---------	---------	-----------	---------------	---------

## 混乱過熱する報道

3	鹿兒嶋女隊力戦ノ図	楊洲周延画・篠田仙果詞書	大判錦絵三枚続	明治十年四月十二日届	〈東京〉松下平兵衛	久留米大学筑後文化資料室蔵	20   21
---	-----------	--------------	---------	------------	-----------	---------------	---------

4	鹿兒嶋婦女子乱暴之図	月岡芳年画	大判錦絵三枚続	明治十年七月四日届	〈東京〉松村甚兵衛	久留米大学筑後文化資料室蔵	22   23
---	------------	-------	---------	-----------	-----------	---------------	---------

5	【鹿兒島新聞之内】田原坂進撃之図	梅堂国政画・詞書	大判錦絵三枚続	明治十年三月二十六日届	〈東京〉沢久次郎	個人蔵	22
---	------------------	----------	---------	-------------	----------	-----	----

6	鹿兒嶋征討紀聞	楊洲周延画・篠田仙果詞書	大判錦絵三枚続	明治十年六月二日届	〈東京〉鈴木記	久留米大学筑後文化資料室蔵	23
---	---------	--------------	---------	-----------	---------	---------------	----

## 大阪における報道

7-1	西南日新記 第一号	玉亭芳峰画・内田正鳳記事	大判錦絵	明治十年（七・八月頃）刊	〈大阪〉勝村利右衛門	個人蔵	24
-----	-----------	--------------	------	--------------	------------	-----	----

7-2	西南日新記 第二号	玉亭芳峰画・内田正鳳記事	大判錦絵	明治十年（七・八月頃）刊	〈大阪〉勝村利右衛門	個人蔵	24
-----	-----------	--------------	------	--------------	------------	-----	----



7-3	西南日新記 第四号	玉亭芳峰画・内田正鳳記事	大判錦絵	明治十年（七・八月頃）刊	〈大阪〉勝村利右衛門	久留米大学筑後文化資料室蔵	24
7-4	西南日新記 第五号	玉亭芳峰画・内田正鳳記事	大判錦絵	明治十年（七・八月頃）刊	〈大阪〉勝村利右衛門	久留米大学筑後文化資料室蔵	24
8-1	文武高名伝 旧陸軍大将正三位西郷隆盛	鈴木年基画・記事	大判錦絵	明治十年五月届	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	25
8-2	文武高名伝 旧陸軍少将正五位桐野利秋	鈴木年基画・記事	大判錦絵	（明治十年五月）刊	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	26
8-3	文武高名伝 旧陸軍少将正五位篠原国幹	鈴木年基画・記事	大判錦絵	（明治十年五月）刊	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	26
8-4	文武高名伝 前原一角	鈴木年基画・記事	大判錦絵	明治十年五月十二日届	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	26
8-5	文武高名伝 西郷隆盛室阿香	鈴木年基画・記事	大判錦絵	明治十年五月十二日届	〈大阪〉前田喜兵衛	久留米大学筑後文化資料室蔵	27
<b>よまびな報道</b>							
9	【日向国】三国峠進撃之図	山崎年信画	大判錦絵六枚続	明治十年八月十五日届	〈東京〉荒川藤兵衛	個人蔵	28 + 29
10	鹿児島暴徒あふむ石 読売新聞六百七十号	守川周重画	大判錦絵	明治十年四月二十七日届	〈東京〉多賀甚五郎	久留米大学筑後文化資料室蔵	28
11	西郷星桐野星	山崎年信画	大判錦絵	明治十年九月届	未詳	個人蔵	29
12-1	西郷隆盛夢物語 上	笑門舎羽田富次郎画・記事	大判錦絵二枚続	明治十年九月三日届	〈東京〉多賀甚五郎	個人蔵	30
12-2	西郷隆盛夢物語 中	笑門舎羽田富次郎画・記事	大判錦絵二枚続	明治十年九月三日届	〈東京〉多賀甚五郎	個人蔵	30
12-3	西郷隆盛夢物語 下	笑門舎羽田富次郎画・記事	大判錦絵二枚続	明治十年九月三日届	〈東京〉多賀甚五郎	個人蔵	30
<b>戦争の終結</b>							
13	【鹿児島鎮定】首実檢之図	月岡芳年画	大判錦絵三枚続	明治十年十一月五日届	〈東京〉林吉蔵	久留米大学筑後文化資料室蔵	31
14	日隅近傍戦図	鈴木年基画・詞書	大判錦絵三枚続	明治十年八月十五日届・ 同年九月刊	〈大阪〉鈴木年基	個人蔵	32

暮らしへの浸透

15 西郷隆盛討死之図 鈴木年基画・詞書 大判錦絵三枚続 明治十年八月十五日届・同年九月刊 〈大阪〉鈴木年基 個人蔵 32

16 延岡陣営図・延岡山中之図・大山鞠問の図・米蔵ヨリ城山を攻 梅堂国政画 大判錦絵 明治十年十一月二十一日届 〈東京〉辻岡文助 個人蔵 33

17 鹿兒嶋戰爭記 進齋年光画 大判錦絵三枚続 明治十年十二月二十八日届 〈東京〉児玉弥七 個人蔵 33

18 鹿兒嶋凱陣双六 月岡芳年画 錦絵 六〇・一cm×七三・〇cm 明治十年十二月十七日届 〈東京〉大倉孫兵衛 個人蔵 34 | 35

19 鹿兒島平定寿語録 月岡芳年画 錦絵 七四・〇cm×七一・七cm 明治十年十二月七日届 〈東京〉津田源七 個人蔵 34

20 西南勇士集 未詳 扇面銅版画 天地一四・六cm、上弦四七・六cm、下弦二〇cm 明治十年頃 刊 未詳 久留米大学筑後文化資料室蔵 35

21 熊本近傍戰爭之図 未詳 扇面銅版画 天地一四・一cm、上弦四五・二cm、下弦一八・三cm 明治十年頃 刊 〈京都〉山口市太郎 個人蔵 35

22 〔西南雲晴朝東風役者絵〕 豊原国周画 大判錦絵三枚続 明治十一年二月二十六日届 〈東京〉長谷川其吉 個人蔵 36 | 37

23 〔西南雲晴朝東風役者絵〕 楊州周延画 大判錦絵三枚続 明治十一年届 〈東京〉山村金三郎 個人蔵 36 | 37

24 西郷腹中之図 未詳 豎大々判錦絵 明治後期 刊 未詳 久留米大学筑後文化資料室蔵 37

25 西郷隆盛妻服中之図 未詳 豎大々判錦絵 明治後期 刊 未詳 久留米大学筑後文化資料室蔵 37

参考図版

1 鹿兒島追討記 西野古海編 半紙本一冊 明治十年二月二十二日届・同年二月刊 〈東京〉木村文三郎 個人蔵 38

2 鹿兒島戰爭記 樋口徳造編 半紙本一冊 明治十年三月刊 〈東京〉又新舎 個人蔵 39

3 【肥後】熊本戦地之図 梅堂国政画 大判錦絵三枚続 明治十年三月十七日届 〈東京〉佐藤新太郎 鹿兒島県立図書館蔵 38 | 39

4 西南征討全記 進齋年光画 大判錦絵三枚続 明治十年 刊 〈東京〉山中北郎 久留米大学筑後文化資料室蔵 40 | 41

5	鹿兒嶋戦記	篠田仙果編	中本六冊(初編・三編)	明治十年二月二十六日届	〈東京〉堤吉兵衛	個人蔵	40
6	【鹿兒嶋記聞内】賊兵激戦之図	山崎年信画・寿々喜詞書	大判錦絵三枚続	明治十年四月五日届	〈東京〉辻岡文助	鹿兒嶋県立図書館蔵	41
7	【薩州】鹿兒嶋大進撃之図	山崎年信画	大判錦絵三枚続	明治十年九月十八日届	〈東京〉上村清左衛門版	久留米大学筑後文化資料室	42   43
8	鹿兒嶋軍記	大西庄之助編	中本三冊(初号・三号)	明治十年三月二十二日届	〈東京〉大西庄之助	個人蔵	42
9	鹿兒嶋県有のそのまゝ、二号	未詳	大判錦絵	明治十年三月六日届・ 同年三月刊	〈大阪〉金井徳兵衛	個人蔵	43
10	薩摩大戦記	鈴木年基編・歌川芳景画	中本六冊(活版)	明治十年刊	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	44
11	薩日略軍記	うきよ年光画・ 内田正風詞書	大判錦絵三枚続	明治十年九月一日届	〈大阪〉鈴木利兵衛	久留米大学筑後文化資料室蔵	44   45
12-1	有名十八史略 西郷隆盛	鈴木年基画・記事	大判錦絵	明治十年十月十二日届	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	45
12-2	有名十八史略 桐野利秋	鈴木年基画・記事	大判錦絵	明治十年十月十二日届	〈大阪〉前田喜兵衛	個人蔵	45
13-1	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族西郷隆盛	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	46
13-2	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族桐野利秋	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	47
13-3	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族篠原国幹	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	47
13-4	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族逸見十郎太	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	47
13-5	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族淵辺高照	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	48
13-6	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族西郷小平	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	48
13-7	【明治十年】戦士銘々伝 鹿兒嶋県士族村田三助	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	48
13-8	【明治十年】戦士銘々伝 西郷隆盛ノ妻	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	49
13-9	【明治十年】戦士銘々伝 西郷隆盛ノ女	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	49
13-10	【明治十年】戦士銘々伝 谷干城君ノ室沢君	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	〈明治十年〉刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	49

13-11	【明治十年】戦士銘々伝 亡種田少将君ノ側妾小勝 池田伝兵衛記事	中井芳滝画・ 池田伝兵衛記事	中判錦絵	(明治十年)刊	〈大阪〉池田伝兵衛	個人蔵	49
14-1	西郷隆盛夢物語二号 上	笑門舎羽田富次郎画・記事	大判錦絵二枚続	明治十年十月十二日届	〈東京〉多賀甚五郎	鹿児島県立図書館蔵	50   51
14-2	西郷隆盛夢物語二号 中	笑門舎羽田富次郎画・記事	大判錦絵二枚続	明治十年十月十二日届	〈東京〉多賀甚五郎	鹿児島県立図書館蔵	50
14-3	西郷隆盛夢物語二号 下	笑門舎羽田富次郎画・記事	大判錦絵二枚続	明治十年十月十二日届	〈東京〉多賀甚五郎	鹿児島県立図書館蔵	51
15	薩賊暴戦一覽	長谷川貞信画	大判錦絵三枚続	明治十年七月二十五日届	〈東京〉砂越新八	個人蔵	52   53
16	西郷隆盛戦死ノ図	細木年一画	大判錦絵三枚続	明治十年十月六日届	〈東京〉黒瀬幸太郎	個人蔵	52   53
17	西南鎮定賞賜図	一英齋歌川芳艶画・ 永島虎重詞書	大判錦絵三枚続	明治十年十月二十六日届	〈東京〉木村定五郎	個人蔵	54   55
18	大新ばん鹿兒嶋暴徒人名集	よし光画	大短冊版錦絵	(明治十年頃)刊	〈大阪〉田中安	個人蔵	54   55
19	【絵本】西郷一代記	早川徳之助編・松月保誠画	中本十四冊	明治十年十月二十九日・ 十二月三日届	〈東京〉小森宗次郎	個人蔵	56   57
20	西南雲晴朝東風 百姓作蔵住家の場	豊原国周画	大判錦絵三枚続	明治十一年三月届	〈東京〉福田熊次郎	鹿児島県立図書館蔵	56   57
21	明治英名百詠撰	篠田仙果編・生田芳春画	中本一冊	明治十二年十月十八日届・ 十一月刊	〈東京〉村上真助	個人蔵	58
22	【現今】英名百首	沼尻絢一郎編・鮮齋永濯画	中本一冊	明治十二年七月十六日届・ 明治十三年二月二十日刊	〈東京〉宝文閣	個人蔵	58

\*「個人蔵」と記載したものは、すべて生住昌大の所蔵である。

本図録編集にあたり、左記の諸機関にご協力を賜りました。  
記して感謝の意を表します。  
(五十音順)

鹿児島県立図書館

柏書房

国立国会図書館

毎日新聞東京本社

久留米大学御井図書館貴重資料企画展

## 西南戦争——報道と、その広がり

編集…

大庭卓也・生住昌大

扉・表紙デザイン…

黒木陽平／KUROKI DESIGN STUDIO

制作・印刷…

城島印刷株式会社

発行…

久留米大学文学部

発行年月日…

平成二十六(二〇一四)年三月二十日